

特36

669

函		第
架		第
號		第

經釋拔萃法語集

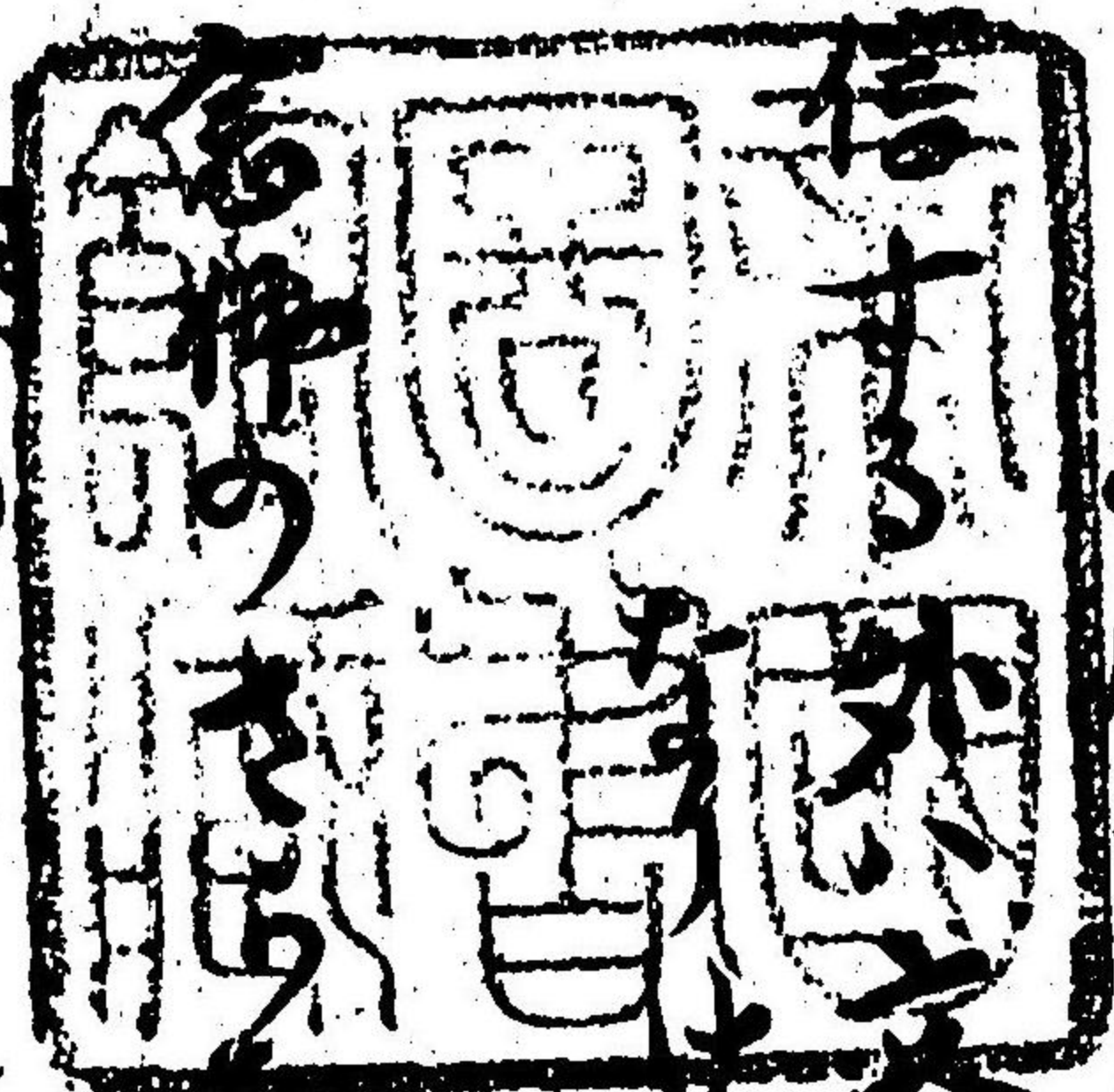
卷之三

(非賣品)

公印

八方の海を渡る

ふしなると



信すも外に文字

信押のきり

朝の東の空

明治三十一年二月

山崎得安





老窮命且夕ニアリ念佛ノ外一人念モ此世界ニトムルナシ
 性来ノ筆癖アリ見聞コトニ彙動心ノ時々之ヲ記
 ス錯乱煩序ナク重複脱漏ヲカヘリミス積堆キ
 ハ拾ヒ集テ箱底ニ埋葬ス更ニ他見ヲ要セス多ク
 札ヘニ散在スル一片アリ師同朋諸士ノ需ニ應ス
 再閱ヲ予ニ求ム答云予存命中ヲ期スルモノニアラス
 サハ今日ヲ以テ予ノ死後白ト認ノ板鈔取捨御随
 意自在ニ付任ス予今數百千年前ノ人ヲ取捨夸

ヨリ數百千歳後ノ人ノ予ヲ取捨スルヲ待ツ歸謫ノ同
 種人庶ノ念々生滅片々痛痒ニ遑アラヌシハコトモ
 コトモシハシハ不可思議尊ニ歸命シオハラシラシラ
 コトシハコト同ク知ス相見テ誰カ微笑スアナカモコク
 南无何如佗佛

明治三十五年三月

小川拙笑



六十九 戈

讀心

龍訣云悟心
向西行亦随之

明治三十五年三月

小川独笑



念佛と
日がある人も
あつぬ世と
茶業の中と
秋のあはれ

万流



經釋拔萃法語集 卷之三

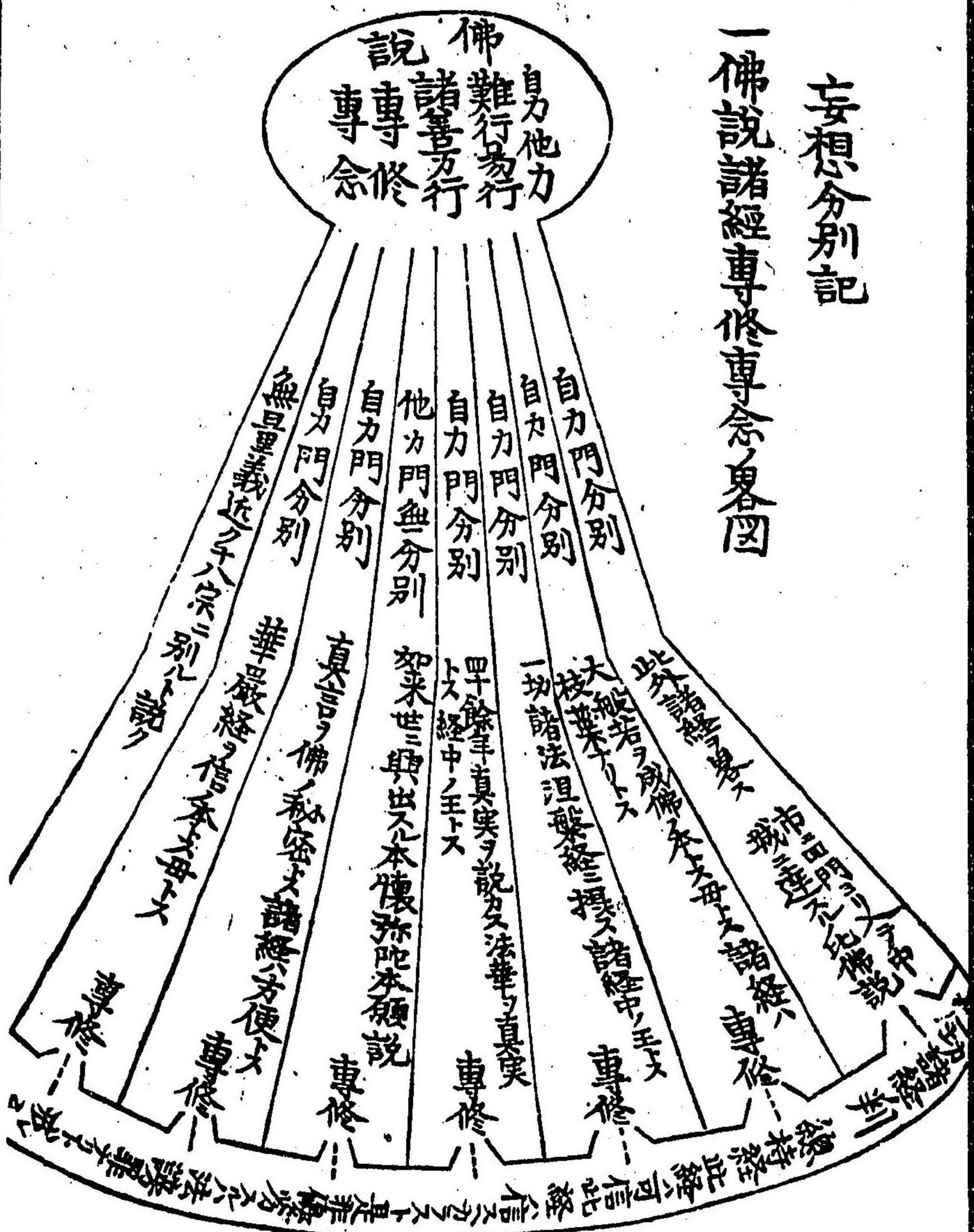
目次

◎妄想分別	一	◎顛倒を憐む	三〇
◎應病與藥の文	二	◎遠く宿縁を慶ぶ事	四一
◎不知の文	四	◎讀經宿縁の事	四五
◎大小乗略節	八	◎信心は凡夫同士にて云々	四九
◎專修と雜修との區別	九	◎佛說說聽の一片	五三
◎經典專修の一證	一〇	◎信心の事	六一
◎佛說大略	一四	◎得果の相違する左の如し	六四
◎相應と不相應との區別	二〇	◎宿業の事	六六
◎專修專念の外相		◎懺悔の事	七一
		◎又々たはことのくり事	七五
		卷之三目次終	

但し本書は小川居士の校閱を得たる者に非らざれば其誤字等は筆記者の誤りと御心得相成度候

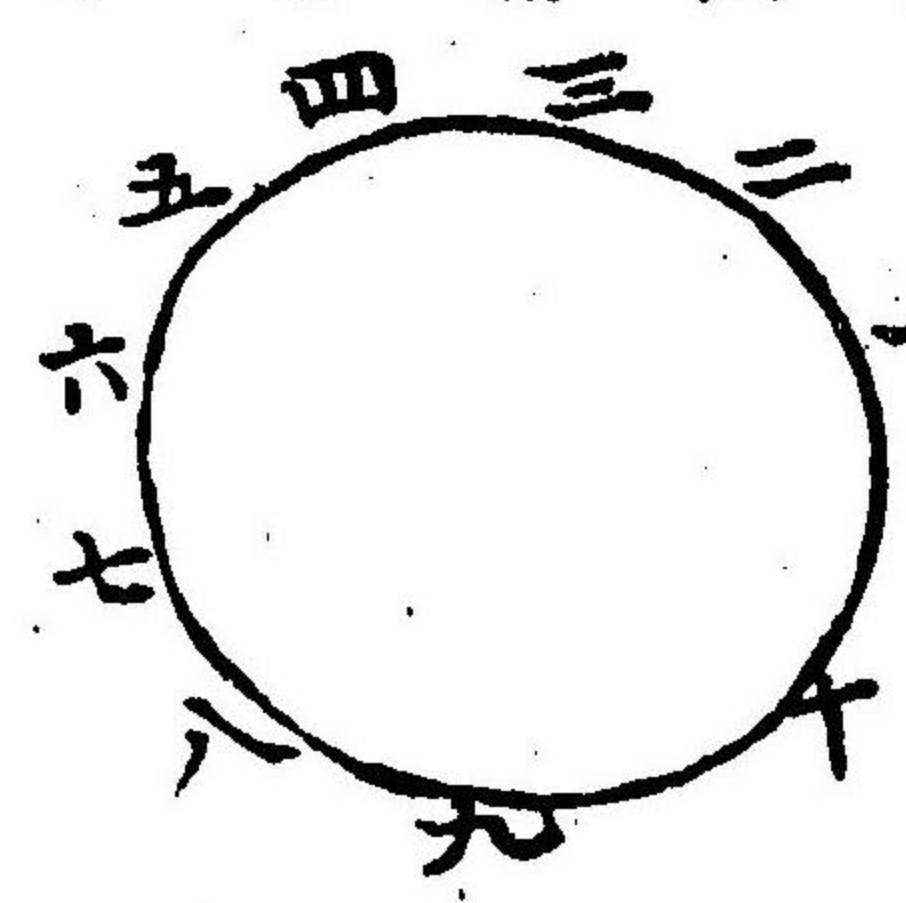
妄想分別記

一佛說諸經專修專念之圖



思ふほどは肥しがたし愚境に入住する人は解了すべし否十人は〇〇是非しらの邪正も分
ぬ愚に遷る無智の者に同ふして唯一向に念佛する略圖

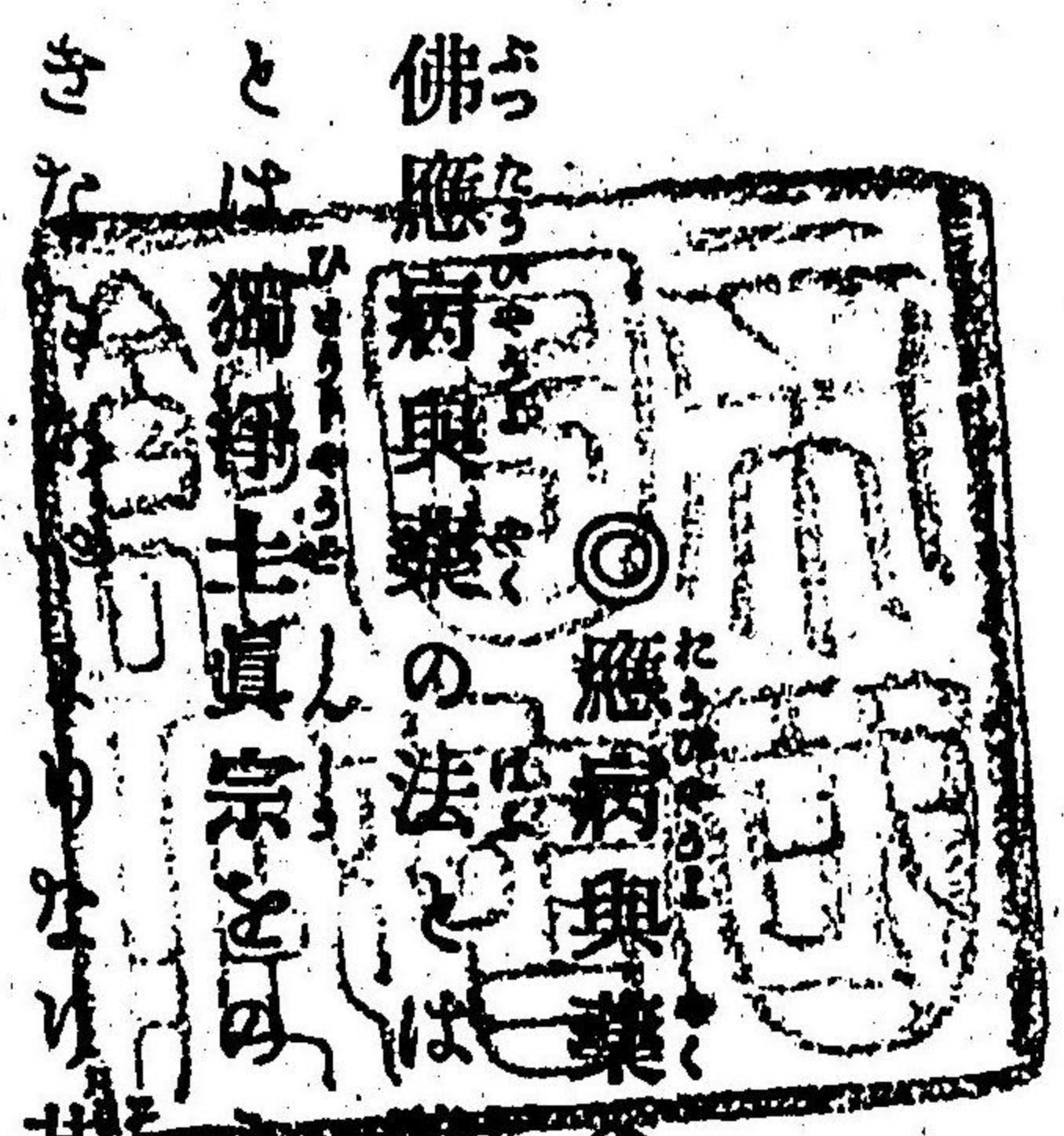
一より十位に達たる
等級と學問智慧心の
分別修善精進の順序
たどれば得業助教資
教勤學などの等級精
進する多聞記憶學者
優劣の名聞の如しみ
な一より十まで精進を求る東岸指授の分別
解信の材料臨終の日に捨る分別なり



是非しらの愚境 十より一に遷る無智の者に同ふするの位なり
天智の境法 分別なきの境
西岸に向ふの境
東岸究竟の境
達學博識多聞記憶の極等
一より進む階級一より十までを智識とす
此智境を出て初の一に遷り無智に同ふするを
愚に遷ると云是非しらのぬと信んず
これをも差別平等位と云能所一致とす
弟子一人も持たすとす是非しらの身にて何を
致へて師となるべきや同信者をはかしてつきて
申す
觀覺佛一心の奉文他力法平等願力不思議の境
に住するの心相とす

經釋拔萃法語集 卷之三

小川獨笑居士述



佛應病與藥の法とは誰もしることなり又根機相應の法
とは獨淨土真宗とのみ申す如くに思ひなすもの多し大
きなりなり其ゆゑは八萬四千の法門一として

根機相應の法にあらざるはなしたゞ淨土真宗の根機相
應と申すは一文不知無才無識の老少男女たらんもの
爲めの根機に應じたる法門と云ふまでなり若こゝに智
識にすぐれ學解にとめる人々は念佛法門を忌むものも

あり又神をこのむものもあり現在を好むものもあり此
ゆゑに總持經に説く世を樂むものには清淨の法を説か
ず無信の者の爲めには菩薩の法を説かず貪着在家の爲
めには淨白の法を説かず智慧を好むものゝ爲めには智
惠を説く空を好むものゝ爲に空を説くとなりされば神
明を好むものゝ機には神明を説く國政を好むものゝ爲
めには國政を説く醫を好む者の爲めには醫法を説く商
法を好むものゝ爲めには商法を説く一切の人々各其機
を異にするが故に一切人々各の機に應じて法を説く愚
痴の機には愚痴の機に應じて説く知識ある機には智識
の機に應じて説く高貴の機には高貴を説く貧賤の機に

は貧賤を説く一切世間中唯一人として捨てざるは佛の
法なりゆゑに應病與藥の法とは云ふなり

◎ 不知の文

予は不知者なり愚痴者なり無知者なり自身を知らざる
なり先自身は何れより來り生るや何に去り往くやをし
らず又我筋骨皮肉臟腑は何れより來りて一體をなすや
も知らず又耳目は何にゆゑに二つなるや鼻口は何ゆゑ
に一づゝなるや又眼は何ゆゑに物を見るや耳は何ゆゑ
に聞くや口は何ゆゑに味をなすや鼻は何ゆゑに嗅ぐや
すべてしらず又何ゆゑに頭上に長毛を生じ腋下及陰處
同く長毛を生じ皮膚には短毛を生ずるや又何ゆゑに生

云べし君臣父子の道儒道に比すれば佛説は骨髓とも云べし又神明は此世界に二十萬千十二神を始めとして一切の人身を保護せられたりと其他無量の善神ありと又惡鬼は七十五億五萬の多きみな人身に害をなすとは灌頂經に説れたり又日は一の世界月も一つの世界にて日天子月天子其中にあり城郭山陸等まで具足して彼日世界月世界に生んと欲するものは五戒八戒の行を修すれば生ることを得ると其をも説れたり又天上に生んと欲するものは一月に七ヶ日の戒行ありて前日の午飯より翌朝まで斷食して門戸を閉て愈念を起し常に戒の行を修して天上に生るの法其他天上に生の法數多の法あり

◎大小乗略節

- 一佛説八萬四千法大別して小乗と大乘と分つ乗につき義二十餘條の義を説玉今略
- 一大小乗中分て二とす一には差別二には無差別姑くこれを略す
- 一目前の淺近のたとへを以て大略をのべて無文の人の了知しやすきにそなへんとす
- 一小乗はたとへば飯を食ふに椀に入れ箸を以て食ふを必用とす先づ椀と箸とを求めて次に飯を求むが如し大乘は先づ飯を求めて次に椀と箸とを求むが如し但し大乘にも椀と箸とを先得て後に飯を得るもあ

り亦小乘にも飯を先得て後に碗と箸を得るもあり
 一經に曰く小乗を學ばずして大乘を修するものは破器
 中に乳酪を盛るが如しと曰く器は小乘なり乳酪は大
 乘なり小乗の器を具足せずして盛るときは大乘の乳
 酪は洩れ流失して溜らずと云小乗は形相戒律を以て
 言行身體の嚴肅を專とするを以て先とす心念を後に
 す但し心念を先にし行相を後にするもあり
 一大乘は心念を先にし行相を後にす但し行相を先にし
 心念を後にするもありゆゑに大乘律說法ある所以な
 り

一大小乘同く信心を以て究竟とす梵行無量信心を以て

攝盡すと云これなり法八萬は信心を以て法とす無信
 を以て無法とす信心具足すれば八萬の法利益を具足
 す信心破るれば八萬の法も亦破れて無利益とす
 一小乗の究竟にいたるは元より言説のつくすべきにあ
 らず無量不可思議に止む大乘の究竟亦言説のつくす
 べきにあらざるは勿論なり但し經中の佛説の文章猶
 口外すべからずとす經文ありといへども文のまゝ口
 外すべきにあらずとす相承宗師同くこれを遺教の文
 中にあるはさずこのゆゑに予亦經文を述べず悟ると
 きは失なし悟らざるときは大弊となると説きたまふ
 也

一 されば大乘の究竟の經の文は口外すべきにあらずとすもし聽者誤り解すときは經のこゝろを破ることあればなり

一 親鸞佛云義なきも常に云ときは義なきも義のあるになると云これなり

一 往生淨土のためには信心を先とすその外はかへりみざるなりとこれ究竟の言なり心もことばもたはれたれば不可思議尊に歸命せよとこれ究竟の言これなり不可思議不可稱不可説の信樂と云これ究竟の言なり一萬づのことはそらごとたはごと不實なるにたゞ念佛のみがまことにておはしますところをば仰せられし

我も人もそらごとのみが申しあひけるとこれ究竟の言なり

一 經には一切言説是皆不實と説玉これなり言説猶不實とす況んや身體の行相をやこゝに佛説あり口外すべからずとす

一 小乗は器なり大乘は乳酪なり器は身體の行相なり乳酪は信心なり器は椀箸の類の具なり信心は飯にたとふ

一 いかに器を具足するも飢餓を治する能はず飢餓を治んとすれば飯を食ふにあり飯あれば器なきも飢を治するを得ると云如し但し行相の器なきときは乳酪を

盛るとき流失して留りおたし故に云小乗を學ばずして大乘を修するものは破器中に乳酪を盛るが如しと云これなり

一形は心に従ふ心は形に従ふと説れたり

一童幼形小なれば心も亦小なり壯年形強大なれば心も亦強壯なり老者形衰弱なれば従て心も亦衰弱すこれを心は形に従と云

一心静なれば従つて身體の形亦静なり心に佛を念んずれば形の身體は従て佛を拜す心怒れば身體手足の所作従て激烈す心眠れば従て身體の形亦臥す心強ければ形従て強し心柔ければ形も従て柔となるこれを形

は心に従ふと云

一形は心を制し心は形を制すと云これなり

一究竟すれば形は生滅す心は生滅せず心は元來無形にして生滅あらず

一佛説に云く形あれば盛衰す生滅の證なり心盛衰なし生滅せざる證なりと佛告云汝彼河流を年少のときに見ると老年の今日に異なるやと答て曰く異なし又告ぐ年少のとき身體壯今老年衰これ生滅の證なり形あるものは萬物みな盛衰従て生滅す心は年少老年河を見る異なし心の滅せざるの證なりと

一身體に戒行を修するは初心心を成就する爲にすこれ

と聖道と云

一 身體の戒行を本とせず信心念佛を本とするは淨土眞宗開師の旨なるは誰も知るところなり

一 往生淨土のためにはたゞ信心を先とす其外はかへりみざるなりと此御文こそは大乗の究竟他力本願一法の極致なるべし

たゞ信心を先としてその餘の行相はかへりみず心をとゞめず決心の人はこの御文にて満足に住す若決心なき人は行相の器なきがゆゑに信心の乳酪流失することありとす

一行相はたゞ信心を盛るの器にして未來世に趣くの要

にあらずとす行相は小乘に屬す信心は大乗の主なり但しこれは大乗中にして他力本願の一法に依てこれを述べ

一 ころもことばもたねたれば不可思議尊に歸命すところもことばもたねたゞ不可思議尊に歸命するには行相形爲はさらに要なしこれを不可稱不可説不可思議の信樂とす此文の如く信心するときは形相行爲に必用なし形相はたゞ信心の乳酪を盛るの器とするのみこれを本願一法大乗の究竟の極致と承ることに佛説ありと云とも宗師文をこゝに止めて經文をあらはしたまはざれば予亦こゝに止む經文をあらはす

ときは或は聽あやまるものなきにあらずとみねたり
 一有我見の人は名利の爲めに地獄に入る無我見の人は
 名利の爲めに地獄におちずと説たまふが如し名利は
 同く名利なりたゞ見によて果報を殊にすと云が如し
 一文不知にして何の分別心もなく奥ふかきことを知
 るの才覺もなく念の心をささとするの智慧もあらず行相
 のいかんも辨へずして本願に相應して不可稱不可説
 不可思議の境に住し心もことばもたぬて不可思議尊
 に歸命して念佛する人たましくこれを見るものゝ如
 し

◎專修と雜修との區別の大畧(曾テ此記アリ今亦クリコトヲ記ス)

一宿業の善惡果報と現業現報と現報現後報等その果報
 無量筆紙言談のつくすべきにあらずこゝに專修と雜
 修の區別佛説に證し其大略を記し佛門初人士の参考
 のたよりともしならんやとその一端を筆するものな
 り
 但しこれは善惡字しりかほは大そらごとの形なり
 そらごとなりたはごととなり
 一佛云一切の言説是皆不實なりとす衆生の虚妄に順じ
 て虚妄を説く衆生は虚妄を聞て眞實を得るなりと無
 量義經にあり略す

◎經典專修の一證

一大般若經に云此經を成佛道の母とす他經を枝葉とすと
 一眞言經に云此經を佛の秘密とす餘經を權とす
 一涅槃經に云一切の法此經に攝すと此經は諸經中の王とす
 一法華經に云四十餘年未だ眞實を説かず此經を經中の王とすと
 一淨土經に云佛出世の本懷惠むに眞實の理を以てすと
 一總持經に云此經信ずべし彼經信ずべからずと經に優劣を加ふは謗法罪なりと戒む諸説法の例略かくの如し

一八萬の法はことごとく眞實なり亦ことごとく方便なり
 一有縁の法を眞實とし無縁の法を方便とすべきいはれなり
 一有縁の法を眞實とし無縁の法を權とし假とす
 一法を專修し餘法一切を攝すべきいはれなり
 一たとへば眞言經に説く眞言供養功德は日中の光の如く念佛の功德は夜の光の如しと念佛を次にす
 一淨土經に説く世界の寶を集めて二十萬年中諸佛に供養するの功德は一聲の念佛に及ばず一聲の念佛を百千萬から分子に碎き其一分子を以て比するも及ばず

終に比すべきにあらずとすと供養功德を以てするが如し

一何法にても其法に相應の行業あり法に相應せざるの
業行はいかに多くともその法の利益あらず此いはれ
は別に活版ずりあり畧す
一經のこゝろを目前の作業に比して記さんとす
一何に故に二十萬年の供養の功德の大重なるも一聲の
念佛に及ばざるや殊に一聲の念佛を百千萬分にして
その一分子にも及ばずとは聞はびたしいかんこれ他
なし法に相應せざる業行なればなり

◎佛說大略

一雞に生る法あり牛に生る法あり猿に生る法あり龍宮
に生る法あり人間に生る法あり天上に生る法あり色
界無色界に生る法あり無生果を得法あり佛境に入る
の法あり法無量あり同く法に相應するの行あり同く
信心を以て本とす
一善惡因果必然但信ずるあり信んぜざるあり同く不可
思議と説玉ふ

一佛告云汝の物あらば汝はこれを取れと一比丘自ら觀
ずるに天下我物なし唯善のみ我物なりと
一法毎に相應の行業あり何れの法も法の如く修行し法
に相應すれば得果は法の力なり必ず其益を得るは佛

語虛妄なければなり

一法無量ありて世界に在來すと説れたり佛は唯在來の法を説く佛の造作する法にはあらず法の世界に有るを衆生知るに由なし佛は出世して世間出世間の法在來するの法を説て衆生に利益を與ふるを佛法とす佛説く故に佛法と名くるは差別に依て名なり佛法は世界法と名るも亦一名と云べし在來の法なれば佛説かざるも依然として法は世界に存す故に法は生滅なし常住の法とす世界は生滅するも法は生滅せず常住す故に常住の法とす佛説虚妄なき一の證とすたとへば生老病死これ生滅の法と云如し佛説て始て生老死

の來るにはあらず佛説かざる前も生滅は生滅なりと云如し在來生滅するを佛説て生滅すと説く豈虚妄あらんや故に佛説云天は地に落海は渴しても佛語に虚なしとそれ然り天は地に落ても海は渴しても生老死は依然として生老死は生老死止まざるものとするが如し

一無量數あり一々の法に一々相應の信行あり何れの法も其法に相應して信行すれば法の力として必ず其利益あるは法に虚妄なきがゆゑなり
一此ゆゑに法の利益を見せ法の驗しを見せて先づ法を信んぜしむる爲めに現在目の前に驗を見るの眞言法

を説玉其法數多あり今我現在目に見ることとをこゝに記す

一此郷に曾て馬を盗むあり此とき中津にて眞言不動王束縛法を行ひしに十餘里の外香春にいたりし馬盜人は馬人共にたをれて往くあたはずこゝにて捕縛されたり不動心なしばりと傳へ云これなりこれは眞言法中の一法なり

一此法を行じて現在に法の如く行ずれば法の如き驗を見ることが得るたゞ此法ありと云も疑ふものなり今現に其驗を見て法の眞言なるを信ぜしむ
一此法を行ずる者はいかにの理ありて束縛を得るの理

は知ること能はずたゞ法の如く文をととなへ如法に手に印を結べば其行ずること法に相應すれば其先きは法の力にて驗をあらはすなり此驗を求めて其行ずるところは他の行を行ずるとも其驗を得ざるは法と相應せざればなりいかに念佛するも馬盜はたをれざるなり無上の念佛と云とも念佛は馬盜を束縛するの行にあらざれば不動法と相應せざる行なればなり
一現在に法の如く行じて現在に法の驗あるを見て諸法の眞實利益あることを信行せしむるの方便とす
一法の如く行ずれば現在に其法の驗を見て先づ法の虚妄なきを信ずるのたよりとす彼を見て是を信ず他を

見て自を信するが如し

一されば人間生を願ふものは五戒を修すれば法と相應するゆゑに必ず人間生を得るものと信ず先づ此法を信じて願ひ求る者は法の如く五戒を行じて人間生を求むるを法と相應すと云いかに十善を行ずるも人間に生まれず法と不相應の行なればなり何に法も法の如く行じて他の行を雜じへざるを專修と云不動法を求るものにして人間生の法の行を雜ゆるを雜行と云

佛は八萬の法を説くといへども雜行を教へず偏に專修をすゝめしむを佛教諸法の例とす今經文こゝに畧

す

一專修の經文は多といへども枚擧にたぬず畧す

一西方極樂世界阿彌陀佛國に生んと願ふ有縁のものは其法に相應し法の如く修すれば必ず往生するは本願力の不思議と申すこれなり

一いかに善根法五戒十善を行ずるも本願の法に相應せざるの行なれば利益を得ずと云これなり各々其法其法に相應の信行あればなり

一彌陀佛本願の法は此世にて其法に相應して修じて其驗は命おはりて未來世にて得る法なり現在成佛の驗を見ざる法なり

一此ゆゑに先づ此法を説くも衆生信ぜず目前に驗を見ざるゆゑにこれに依て目前に法の利益驗を見るの眞言を説て法の眞實を信んぜしむる爲に眞言法を先づ説き後に淨土往生得果の法を説玉これなり

◎相應と不相應との區別の事

一たとへば世界中の金を積立ると腹痛を治せず一匙の薬を飲痛みは即時に止むと云ふ如し百萬圓の金は腹痛を治するの法に相應せざるゆゑにいかに多しと云ふも功のしるしなし一匙の薬は少小といへども法に相應するゆゑに痛を止むと云ふ如し
一酒造は酒造に相應の業行水糶米飯を和して酒となる

家立は家立に相應の業行あり材木と大工の業行にて家成る

一いかに山の如く材木を集むるも酒とならずいかに山の如く糶水米を積むも家成らず法と相應せざればなりと云如し

一いかに二十萬年供養するも西方極樂に往生をうる法に相應せず一聲の念佛は本願相應するの行なれば比すべきにあらず

一いかに五戒十善を行ずるも本願の相應の行にあらずゆゑに往生せずいかに念佛するも人間天上に生れず法に相應せざるゆゑに

一五戒十善は人間天上に生るの法に相應す念佛は西方往生の本願に相應す故に云淨土の行にあらぬをばこれも雜修と名くとはこれなりとしられたり

一如實修行相應は信心一に定めたりと願に相應するゆゑに外の雜縁さらになしとは念佛ばかりなりとしられたり

一至信心樂欲生我國乃至十念若不生者の御誓と申すなり聞其名號信心歡喜乃至一念と重願の文かくの如し此願文中に諸供養の文なしゆゑに此本願を信じて往生を願ふものは諸善根に心をとゞめずして一向に念佛すべしと示し玉ふ

一諸善萬行はめでたけれども本願の行に相應せず念佛は本願に相應の行なるがゆゑに信心のうへには佛恩報謝の行は念佛に限れり念佛の外一切の佛事をば念佛を助けますの助業と名け報謝と名けず

一念佛の外一切佛事身體手足金錢まで報謝と名け香花燈明佛檀掃除まで報謝と云は都合よけれども正教中に見ぬ名目なり若し前三後一ことごとく報謝と名けば乞食非人の家なし手なへ足なへ腰ひきづりの不具人及び病床にありて身體のかなはざるは報謝の行常に不足とす

一心に不足を生ずれば満足の心に住することなし満足

の心に住せざれば安心の日あらず根機相應の佛恩を仰ぐことかたし故に助正ならべて修するをばこれも雑修と名くとはこれなりとしたり助業を好む人をば自力を勵む人とも名くとはこれなり

一念佛の外は本願の行にあらず願に相應の行にあらずゆゑに雑修と名くとなり南無阿彌陀佛と申して何の不足ありてかくせ法門を云て人をよまどはし無上の法流をけがさんことなげかしく候とはこれなり

一本願相應の南無阿彌陀佛を申せば往生を願ふ行人に於て少しも不足なしと申すことなり然るに念佛の外佛事ことごとく報謝の行なりと云て人をよまどは

し法流をけがすと戒めたまふこれなりとしられたり彌陀回向の御名なれば功德は十方にみち玉と圓融眞妙の正業至極無礙の不行とも申すなり

一念佛を申しながら報謝の行の不足として善根の手足をも報謝と名けてこれを修するは名は報謝なれども其實は雑修と名くべきかそのゆゑは念佛を申して何にの不足の心ありて念佛の外佛事を報謝として勤むればなりこれをならふると云

一信心決定のうへは行住坐臥時所諸縁をきらはず上盡一形命あらんかぎりは稱名念佛するを報佛恩とは正教正信偈和讃八十通の文證これなりとみねたり念佛

の外に佛恩報謝と名けたる行業は諸經諸釋中予の眼
球に觸れざるものなり

一 蓮如佛は無上の法をけがすことなげかしく候と仰ら
れたり予も宗師の御なげき述懐に順じて無文無知の
人に宿世聞法今重て聞く同朋のためになげかしくも
おもふなり但し何れも宿世聞法の數不足にて佛力も
及ばずとあれば亦怪むべくもあらずたゞ自身遠く宿
縁を慶び大きに所聞を慶喜するのみ不便のことなり
とするのみあなかしこく

一 今や寺參詣苦行手足金錢其他一切の佛事をことごとく
報謝とおしへ報謝と心にて忙しくもする宗師はこ

れをならべて修するを雜修と名くとすならふるとは
念佛も報謝なり餘行も報謝なりとするをならふると
は申すなりこれをならべず信のうへは一向に念佛す
るを專修とす專修念佛の人あればあだをなすものあ
りとす諸善萬行に心をとめずしてと云參詣苦行手
足金錢一切佛事は諸善行なり諸善行を報謝と定ると
きは乞食不具人病床上の人は報謝の行を缺くものな
り他力に乗ずるには缺くところ不足するところなき
本願なりと承る不足の心あり不足を勤めて添へて満
足せんと自力をはこぶを雜修と名く
一 專修念佛の宗旨は乞食家なし手なへ足なへ不具人も

さらに不足とするところなく信じて念佛を申さば佛
 になるとの仰の如きにて満足心に住し少しも不足な
 く南無阿彌陀佛と申して何にの不足なくいよく根
 機相應の御本願のとふとやありがたやと行住坐臥も
 いらばれずとはいよくありがたくも佛恩を仰ぐも
 のなり

一 佛恩報謝とは念佛の一行にかぎれりこれを大悲を行
 ずると申すなり念佛の外一切衣食住まで念佛助業と
 名くとは經釋の正教なり近く正信偈和讚八十通を以
 て證とす乃至十念一念若不生者の誓願のこゝろをあ
 らはすがゆゑなりとは予の業識見なり

一 但雜修の人往生せずとの音信もなし專修の人往生す
 との便もあらず人々好みに從て死ぶがよろしい未來
 世のことは知られぬことなり予は佛說宗師の教へに
 依て專修念佛して死するものなり

一 親鸞佛云く念佛は淨土のたねやら地獄の業やら總じ
 て存んぜずたとひ法然上人にすかされて念佛を申し
 て地獄におちたりともさらに後悔はせず其故は餘の
 行を修して佛に成るべき身にして念佛を申して地獄
 におちて候はゞこそすかされたと云後悔も候はめ何
 れの行も及びがたき身なればとても地獄はすみかな
 りとすこれは文のこゝろを寫す

一次に彌陀の本願まことならば釋尊の説教もまことなり
 佛説がまことなれば善導法然の仰せもまことなり
 それがまことならば親鸞が申す旨もまことなり愚身の
 信心かくの如しと(これも本文こゝろを寫す)
 一予亦此宗師の決心に習ひ決心す
 一彌陀佛のたすくると云がまことなら釋迦如來の説法
 まことなり佛説まことならば善導法然親鸞蓮如佛の
 おしへもまことなりそれがまことならば予の信心往
 生もまことなり予の決心も亦かくの如し此法の外に
 未來世に向ふの法を行じて佛にもなることをうべき
 を行ぜずして此念佛を申して地獄にもおちて候は

後悔もすべけれど此法の外には一法もあることを
 知らざればもし此法にあわざればむなしく死る外は
 あらざる身なりこのゆゑに念佛を申して地獄におち
 たりとも後悔せずと決心す
 一仰信として此わけもしらず思案もせずたゞ教のままを
 信じて念佛を申して往生を期する人ありこれは宿世
 聞法の厚き人と云
 一解信として學問をし又は多く聞き道理義理を辨て後に
 決定心に住せんとする人は此宗師の決心に習はざれ
 ば決心をばぬぎるものか
 但しそれほどにもおもはず推究せず漠然として自

ら信じたるやうにひまへたるはいかにあるべきや
是らの人は自心の決定をば云はざる也いかに法文
をば語るも自心の決心をば述べざるなり述べざれ
ば決心なきゆゑと云べき也

一文に曰く梵行無量信心攝盡す信に二種あり一には信
二には求信で推究せざるは信不具足なりと

眞實の信は必ず精進すと云のころなり何れも宿業によるをなり

一宗師若し決心の文を遺したまはずば予の如きも決心
を習ふところあらずまことに師教の思厚を仰ぐなり

◎專修專念の外相

一助正ならべて修するをばこれも雜修と名けたり一心

を得ざる人なれば佛恩報ずる心なし

一利他の信樂うる人は願に相應するゆゑに教と佛語に
したがへば外の雜縁さらになし

此二首のころを予業識見を以てうかゞへば同く
專修專念を得ると得ざるとの心相をあらすものと

す

一專修とは一行專念とは一心なり一心とは信心なりさ
れば一行一心なるを攝取してすてざれば阿彌陀と名
づけ奉つると光明寺の和尚のたまへりと始の一首は
淨土の行の中に正助の二行を分つ正業とは念佛の一
行とす餘行一切を助業と名く此人既に雜行雜修を勤

めずして唯淨土の行ばかりを修する人なり其中に念佛も佛恩報謝とし香花燈明勤行參詣苦行も報恩とし缺くべからずと苦行を以て念佛の行と等しく同等の心に住し并べて行ずる人を是も雜修と名くとなり此人專修專念満足願に相應するを知らず念佛の外の苦行を缺くときは不足心を生ずる人なり此人專修專念一行一心に住せず心を分ち岐別し心緒多岐あり一心にさらによの方に心をふらずと是を教へられたり一此人は念佛の行と餘の苦行をも一荷にし同等に修し佛恩報謝くと苦行を旨とするなり此人は一心に得ざれば念佛申すばかりなりとの佛恩ほうずる心なし

と申すなり誠に現在の人を見るに念佛の外の苦行を専ら報謝くと勤め苦行を旨とする人は念佛の相續するをば度外にして勤めざるなり果してそれ念佛の佛恩を報ずる心はなくして他の苦行を以て報謝と定むるが故に甚しきは專修專念の名さへもしらざるなり念佛せざるのみか却て念佛のかずを多くとなふるを見て自力を勵むと云ふことこれ亦物もおぼぬあさましきひびごとなりとの仰の如きより又念佛を申せば自力になるとおとすもあり又念佛ばかりとなへたら往生するやうにおもへりとの文を引て念佛を留むるもあり

一但し念佛ばかりをとなへたらば云々の文はよく前後時機と人機に對する御詞なるも其分別もなく念佛をとむむるの材料とするあさましきいたりなりかやうに念佛をとむめ障礙するあり此人必ず一心を得ず人の往生をさまたげする人なり故に菩提きうまじき人は專修念佛にあだをなすと仰ありき佛説若ほんならば大變く佛説に言く比丘念佛するとき敷物のゆびみたるを傍より敷物ゆびみたりと申して引きなほさんとするとき念佛を切たり其業報にて五百生の間平土に生を受けずして常に片阪に生を受け苦みたりと説けり是は深切に敷物を引き正したるも念佛を

中止したる業と承る況んや出る念佛を出ぬやうにおとし自力とか何とか云て物もしらぬ者をおどして念佛を止めしむ其業幾何や此人自心に一心を得ざる證とみいたり此人一心を得ざる人なるゆゑに自心に佛恩を報ずる心なしとあらはせりそは我は佛恩報ずる心はありと云はんか他の苦行を以て報謝とするも念佛を申し相續して佛恩を報ずる心はなきなり自らこゝろみて知るべしされば此讚の佛恩報ずる心なしとの報恩とは念佛を申し報ずる心なしとのことなりと知られたり一利他の信樂うる人とは此利他とは説教し教導するの

利他にはあらず利他の信樂とは自己信樂し念佛一向
なれば見聞して他も自ら法縁を起し又は其人を見て
信心をとる人の出來るを利他の信樂とは申すなれ説
教々導を云にはあらずとは説教々導は自心に信樂せ
ぬ人も説教はするなり此ゆゑに利他の信樂うると信
樂の二字あり説教して利他するの云には非ず信樂し
てのあまりあふれて利他となるの利他なるをあらは
すものなりとす所謂ありがたやくとよるこぶ人を
見て信をとるなりとの利他の信樂念佛專修の人を利
他の信樂うる人とは名けたりと見たり此人本願相
應する人なれば教と佛語にしたがひたる人なり此人

一行一心なれば外の雜縁さらになしとは專修專念一
行一心に住して満足し少しも不足の心なくさらに他
の苦行を以て旨とせざれば唯念佛の一行專修して西
岸に向ひ心を一つにしてさらによの方に心をふらざ
る人なりと名けたるものなりとは予の業識所見のく
りごととなり
一爰に一人の女子あり一言の法文を談ずる能はず唯念
佛の一行にて満足心に住して相續する人あり此人の
信樂專修專念相續稱名するを見聞して追々に其信樂
をしたひ終に二百餘人の同胞同心念佛相續する人を
得たりこれこそは利他の信樂うる人なるべし此人こ

そは願と相應し教と佛語にしたがひたる人なるべし
此人さらに他の業行を旨とせずゆゑに外の雜縁さら
になきを見るこの人を見て此御和讃の心をうひひ
たるものなり

此人の同朋親近なることは河に流る柴の比喩一味同
行前後往生をするの親みを見るなり

一されば願は法談物語りを主とせず一大事の志ある方
々は願に相應し教と佛語にしたがひて専修念佛に住
して五十年限りある世界を過ぎ西岸に一定向ひたま
はんことを願ふものなり我は是外しらぬ邪正は存ん
ぜざる未來世なれば唯佛語を信じて念佛を申して死

なんと期するものなり未來世の音信もなし便もなし
見たる人もなし五十年世界第一等の學者となるも未來
世は見ぬものなり

一助業を好むものこれ自力を勵む人なり自力と云は我
力をたのみ我心をばげみ我さまぐの善根をたのむ
人なり上盡一形とは念佛せんこと命おはらんまでと
なり念佛の外一切佛事を善根と名け助業と名く

一娑婆永劫の苦をすて、淨土無爲を期すること本師釋
迦の力なり長時に慈恩を報ずべしと

是は善導大師のこゝろを述べたまふ予は實に本師の
力にて淨土無爲を期するなり歌て曰く○たすかると

種々に善巧方便し教へてかへる釋迦は彌陀なりと
後の日はからず思ひ浮るに和讃に釋迦牟尼佛としめ
して不伽耶城には應現するとあれば暗合く

一よそめには後世者ともしられず世の中にまぎれてひ
そかに往生する人ありこれぞまことの後世者なり時
機相應の往生の人なりこれを彌陀は至心とおしへ釋
迦は至誠心と説き善導は眞實心と釋したまへりとは
法然佛の料簡なり

一又名利は生死の絆な三途の鐵網にかゝると是は寶積
經の文のまゝ法然佛の述るところなり
一又學問して名利の心に住する人は順次の往生いかゞ

あらんずらんと云證文も候がかしとは總持經の文の
こゝろなり是は親鸞佛の料簡なり

以上同名聞として外相に見ゆることを戒むる同一なり
一牛ぬす人とはよはるとも後世者佛法者に見ゆるやう

にふるまふべからずと

一又内心にふかくたくはへて外相に見へぬよふにふる
まふべしと

一人數の中に出でよるこぶは名聞なりひとり居てよる
こぶ法なりと

又他人に沙汰あるべからずと又相外に見ゆるやうに
ふるまふべからずと

以上は外に見ゆるやうに
 ふるまふべからずと戒め
 たまふは經釋同一なり蓋
 し專修專念に導くの眞義
 なり專修の法器なり
 一 世間出世間理一なりとは
 佛說法華經に見たりと
 れば世間事を引て專修專
 心のよふを知らんと欲す
 一 忠臣藏大石藏之助は一
 心一向至心に敵を心け果



んとす故に外相に其色を人に見せぬやうにふるまひ
 外相は不忠臣の如くふるまへり天川屋は兵器を櫃中
 に收めて人に見せぬやうにふるまへりさらに名聞を
 求めざるのみか名聞を大に慎み恐れたり是は世間煩
 惱の一道といへども雜行雜修をまじへず專心專念專
 修一心一向さらに餘の方に心をふらず唯一向に敵人
 をねらひねてもさめても命あらんかぎりには主恩に報
 謝の心屈せず撓まず身命を抛ち身も己も忘れて至心
 にこれを念ず故に外相に人に見ぬやうにふるまへ
 り世間小事も以て一大事に比るに足るべし
 一 大石天川屋は外相は遊郎の如く兵器は櫃中に收めて

人に見ぬぬやうに忠臣のすがたをあらはさず慎みたるに終に忠臣の名は洩て千歳の後にあらはれてかくれず善惡によらず一心の感通するの理は一つなり
 一されば至心に本願を信ずる人は外相に見ぬぬやうに心おけて佛前の道具は天川屋の櫃中に收めて人に見せぬやうになるべく質素を旨とし唯々一佛の阿彌陀如來を念ずるは大石の敵人をねるふが如くさらに餘の方に心をふらず佛恩相續をひそかにし餘そ目に後世者と見ぬぬやうにふるまひ念佛するを専心專念一心一行の信者の心かくべきの真相なるが故に名聞を戒むること上に述ぶるが如く佛も宗師も示したまふ

としられたり
 一大石は唯一人内心に深く一心にたくはへて外相に見ぬぬやうにふるまひたるも何れにかもれて四十餘人はひそかにこれを知り得て訪ひ來て同心を結び同じ心に住して一心一向に忠臣を共にせられたり
 一今信者も亦かくの如し一人内に深くたくはへて外相に見ぬぬやうにふるまひよそかに念佛相續すれば何れにかもれて一大事の志しある人の目には見ぬて尋ね來て一心專念を共にして往生を期する人々の人数少なしといへどもさらによの方へ心をふらず念佛相續する友を得て川に流る柴の如く前後往生の契りを

結ぶ同行に親近するは專修のゆゑなりと善導佛も示されたるの證友を見ることを得たりされば助正ならべて修するをばこれも雜修と名けたり一心をいざる人なれば佛恩報ずる心なしと

以んみるに是も佛事是も恩謝參詣も報謝學問も報謝是も彼も信心決定の後には佛事も世事もくく報謝なりと云は至極理屈は密なれども經釋に見はず論釋にも見はずされば私言なること知るべし

一佛恩報謝とは一には信心二には稱名此二を以て眞成報謝とは經中に見たり釋には教人信眞成報佛恩と云もあり此外善行佛事は因果業報功德勿論といへど

も佛恩報謝と名けたる明文を聞かず○信心と稱名とを專修專念するを一宗の旨とするは佛說によるが故に此二つを不足とし餘の佛事もならべて同くするを助正ならべて修すると申すなり此人一心を満足とせず故に念佛相續して佛恩を報ずる心なしとあらはせりと云ふは予



の業識見なりつくく世人を見るに一心を以てさら
に餘の方に心をふらずして信心の後一行稱名相續に
て本願相應と信じ満足の心に住し一行念佛を修する
人は信心も堅牢なる相見にたり是に反して寺参詣も
報謝寄附も報謝法談も何もかもと雜る人々は果して
念佛相續して佛恩を報ずるの心なきを見るなり此人
信心も堅牢ならざる相見にたり雜修の人は信心堅牢
ならずとは經釋の明文あり懈慢國に生ると經には説
れたり信じて念佛するは十八願の文意たるは誰も知
るところなり此行信の外一切の佛事は十八願にあ
らず故に御和さん正信偈八十通の中に信じて念佛する

即信心正因稱名報恩の二つに限りさらく別のこと
あらばしたまはず本願の旨をあらはすが爲なり予の
信心如此別義を存せず

◎顛倒を憐む

一人の予の云を聞きあやまりて云其ことばに云寺参
詣すべからずと云々又金錢を出すべからずと云々と
其原因なむるべからず
一信じて報恩の念佛を申すの二つを以て本願行とき
しに近頃は變じて寺参と金を出すべしとの二に變化
したりかなしきことにはあらずや
予は未來世のことは是非しらぬ邪正も分ぬ此身なり

と聞信す且四大師を以て師と決定す故に師の云へる
ことをば一言も加へず減せず文のままを信じ句のま
ゝを述ぶ今聞ちがはたるを案ずるに左の御文を申す
を予が私の申すやうに聞き取るものと申すことなる
を知るなり

一 何べんともなく群集する條當年より其出入をとむむ
と又さらに名聞利養のためにあらず出離菩提の爲め
なるが故なり乃至偏執するなかれ云々と

一 此御文を申せば聞ちがへて寺參詣をとめたりと云
偏執をなすものなり果して偏執するものあり
一 近頃佛法の次第以の外相違す其ゆゑは門徒の方より

物をとるをよき弟子と云信心の人と云へりこれあや
まりなり弟子は物をだに多くまゐらせば我力かなは
ぬども坊主の力にてたすかるやうにおもへりこれも
あやまりなり師弟ともに極樂には往生せずして地獄
におつること疑なしと

此文を申せば金錢をば出すべからずとめたりと聞
ちがへて云ふものあり此文は邪業自活經の文なりさ
れば佛説なり

一 又一紙半錢も佛法の方には入れずとも他力に心をか
けて信心ふかくばそれこそ願の本意にて候はめ何ご
とも佛法につけて世間の欲心もあるゆゑに同朋を云

ひおとさるゝにや乃至なく筆をとりてこれをし
るして歎異鈔と名く他見すべからずと

此文を申せば一文も錢は出すなと留めたりと聞ち
へて申すものもあり

一實悟記に御本尊の前御蠟燭は證如上人の御ときより
始まる佛前の燈明は御名日七ケ日一ケ月中に燈され

候證如上人の御代より毎朝ともされ候實如上人の御
代も蓮如上人の御代と同く一ケ月御名日ばかり燈さ

れ候と
此御文を申せば燈明は御命日の外は入らぬと云と聞
ちへて云ふものあり

一御正信偈御和讃八十通の中には御佛飯線香蠟燭御花

のことは一句も述べたまはずと云へば御佛飯はいらぬ
香花燈明の供養は入らぬと云ふときちへたるも

のありて留めたりと云ものあり予は御文のまゝを申
し御文になきをなしと申し有るを有ると申すばかり

なり是非は存じ申さず
線香一本花一本一燈の功德を説かれたれば予は是を知

るこれは佛説なりされども四大師正教中に見ぬゆ
ゑに一言もこれを口にせざるなり眞言宗の人來ると

きはたま〜には佛説なれば申すなり
一他力眞實をあかせるもろ〜の正教は本願を信じて

念佛を申さば佛になる此の外何の學問の往生の要に
やあるべきと又學問を好まんよりは一向念佛して往
生をとぐべしと

此文を申せば學問は入らぬと云學者を輕んじたと云
と聞ちがへと云ものあり

一七ヶ條に御誓印したまひて唱導に趣かせたまはずと
云へばきもちがへて説教者を輕じたと云ものあり

一名利は生死のきづな三途の鐵網にかゝると又學問し
て名利の心に住する人は順次の往生いかゞあらんす

らんと云證文も候がしと此二大師の文は經説の文
のまゝなれば此文を云へば僧は飢る外なしと恨むも

あり

此外諸文を畧す聖教の文を申せば或は聞ちがへ或は
心に叶はぬとして種々の誹難を申す輩多く聞ゆ若し是

らの文句不用ならば取除くべきものか文あれば文を
申し文を信んずるは當然なり若いやならば佛や宗師

を御流罪なりとも焼打なりとも責むべし予に關係な
し予は唯憐愍の心に住するのみ世界中の人師集りて

喋々然と囂々焉として予と誹難するも○の屁ともお
もわぬなり予は釋迦如來より傳受す予若し答辯能は

ずば釋尊の閉口したるなりとしるべし若予が四大師
の文を申して障礙あらば四大師の文教は反古たるべ

但親鸞聖人は一念の邪義と毀るもあり又法然聖人は
 口稱義と難ずるもあり佛弟子にして佛入涅槃を幸と
 し喜びたる比丘もあり法師にして謗を受けざるは魔
 の屬なりとも説けり釋迦如來を金色と拜するもあり
 赤土の如く見るもあり法然親鸞を佛なりと信ずる予
 もあり亦怨敵の如く見たる古の者もあり同く業識の
 所見と申すなりいかになりとも勝手次第自由次第業
 識をつくして五十年を終るのみ佛説若ほんならば大
 變く御用心専修専念往生うたがひあるべからず若
 しうそならばさもあるべし

一予聞ところは別に記しあり次手に少しく亦こゝに記す
 一佛恩報謝の第一は信心決定なりとは虚空藏菩薩經に
 説たまふ
 一稱名眞成報恩とは正法念處經に説たまふ此外に佛恩
 報謝と説たまふを聞かず
 一一人を信ぜしめ一人を解了せしむるは其功德無量無
 邊不可思議にして凡夫のしるところにあらずとは未
 嘗有因縁經に説たまふ
 但し功德を説くこと如是なれども佛恩報謝となると
 の文なし

經中所說の眞成報佛恩とは信心と稱名との二つにか
ぎれりと見へたり

但し釋には自信教人信難中轉更難大悲傳普化眞成報
佛恩と云ふことあり

○信心と稱名報恩の二つには名利其他の垢穢入る能は
ざるにや經釋の戒めなし教人信には名利其他の垢穢
入りやすく自損々他あり易くゆゑに百方佛宗師の嚴
戒みな地獄を以て嚴戒する條々限りなし
但し教人信もよく教人信すれば佛恩報謝ともなると
説れたり

一相承の第十八願の願文に唯々信心と念佛稱名との二

に限り此ゆゑに他力眞實をあかせる諸の正教は本
願を信じて念佛を申さば佛になるとあらはせりされ
ば和讃正信偈八十通は信心正因稱名報恩の二に限り
餘の善根佛事一點も加へざるは本願のまゝを傳ふる
故なり

一故に相承と專修專念即一行一心即信心正因稱名報恩
の二に限り本願なるゆゑに誓願なるゆゑに此二つ
の外一切の佛事は十八願にはあらず後の信者の思ひ
く設たる佛事なること明かなりされば助正なら
べて修するをばこれも雜修と名けたり一心を得ざる
人なれば佛恩報ずる心なしと○雜修の人は念佛相續

の佛恩報ずる心なしとなり

但しならふるとはいかゞするにや此文のこゝろ
 よくうのふべきことなり予重複にくりごとを云
 ふは全部を讀む者なきを知るゆへに所々に一つ
 ことを述べ記す所以なり實語記に燈明など毎朝と
 もされざるこそは助正をならべざるとの行相なり

一專修專念とは釋迦如來八萬の法を説くもことごとく
 專修を教へたまへり雜修を教へたまはず

一されば何れの宗旨も各々專修するを佛説に順ずること
 とは申すまでもなき經典に明かなり予は經典中にて
 明文を知る

一淨土眞宗を信ずる者相承大師の專修を旨とし雜行せ
 ざるを宗旨とするは勿論なり誰れ知ることもなり

一專修の證文は正信偈和讃八十通を以て近き證據とす
 べし鏡とすべしされば正信偈和讃八十通に記載なき
 名目は本願にはあらざるなり本願にあらざるをば記
 載したまはず故に正信偈和讃八十通に他のことをま
 じへざるなり往生淨土の爲めならば本願にて満足た
 る勿論なり此ゆゑにもろくの正教は本願を信じて
 念佛を申さば佛になると云は大師の直説なりこれぞ
 本願の文のまゝなりとしたり所謂信心正因稱名
 報恩を本願相應と云此外一切の佛事は十八願にあら

ざることは云までもなきことなり

一 諸善萬行は佛説なり専修念佛の佛説なり諸行往生を願ふ人々は萬善諸行を修するは當然なり専修念佛往生を願ふものは諸善萬行をさしおきて専念せよと宗師は教へられたり其専修とは信心正因稱名報恩の二つに限り此二つを本願なりとす此二つを専修するを本願相應とすなり此ゆゑに正信偈八十通は此二つに限りて記載せられたり
信心決定し稱名相續の後是人々各々分により善行するは妨なきは云ふまでもなきなりといへば助正ならべて修し終に専修相續をすつるものあるなり但し正

信偈八十通になき名目を申さば

一には御堂一切佛具鈎鐘鈎鐘堂佛檀五具足佛飯香花燈明打敷盤莊嚴一切悉く本願にはあらず況んや金錢勞力身體の苦勞一切本願にはあらずたとひ密に勤るも本願にあらざるゆゑに往生の用あるにあらず一切の佛事を缺くも信心正因稱名報恩の二つ全くせば往生には不足なきいはれなり又いかに日々參詣の勞を勤るも時々法席を設くるも本願にはあらずされば往生の用にはあらず本願にあらざる佛事を本願とならべて修するを是も雜修と名くと申すなり
一切佛事を以てこれも報謝これも報謝と云ひならは

したりされども佛恩報謝とは信心と稱名に限るは佛
 説の明文あり此外は唯善事と申なり報謝と申す文名
 なし總じて雜行を好む者は是も佛説なり何の妨あら
 んやと云て雜修するなりたとへば大日如來藥師如來
 も佛説なり時々式を以て供養するも禮拜も何の妨あ
 らんやと云ふが如し眞宗の人云是も報謝なり是も報
 謝なり佛事なり何の妨あらんと自心を慰めて雜修
 するが如し雜修と云の名を忌むゆゑに報謝と云御取
 持御手傳など云美名を設て勤めとす其心は雜修する
 人々なり此ゆゑに助正ならべて云々戒られたり何ゆ
 ゑに雜修なるやと云へば此人に專修念佛の相續の稱

名せざればなり本願の報恩たる念佛をば傍にして餘
 の參詣苦行を本とするなり
 一甚しきは云稱名は自然任運なれば勤めて申すは自力
 になると自ら恐れて黙して勤行などは勤めてせざる
 べからず香花燈明勤行も報謝の行と云此勤行をも自
 然とするや自ら思ひ立て勤行するは自力にはあらず
 や學者の分別も妙なり不便のことならずや稱名自力
 他力のこととは正教中に明々日の如くあらはせり業識
 の目潰れたると○○○○
 もし思ひ立て申すを自力とせば善導は一番の自力者
 なり二番は法然佛同く自力念佛者なるや次に親鸞蓮

如佛同く自力者なるやと云は學問を究めざれば一應
 知て十八願の奧義を知らず故に稱名を勤むるとい
 にとの理巧の學者こそあはれに候とは予の業識の所
 見なり此學者は往生を學問の理巧を以て定んとし東
 岸に依止して西方に向はざるゆゑなり一宗の學解に
 依止して漸く本山以下を世界の如く思ひ名利僧を職
 とし生活道具にしたるあさましき心中學者の云ひご
 となり不便と云はざるべからず

一往生の得否に於ては凡夫の定む可きものにあらざる
 は勿論なり故に予は是非しらぬ邪正も分ぬ身と信ず
 ればなり但し正教の明文經典の明文に於ては世見名

利眼中では殆ど明めがたしと信ずるなり法然佛を口
 稱と謗し親鸞佛を一念の邪義と毀るあり二師を分別
 見するあり業識それ見るべし

一經に言く智者は獄中の囚の如く愚者香音天の如しと
 ○あんずるに智者は此世界を觀じ生者必滅今にも息
 たにはてんやと囚人の刑戮の命を獄中に待つが如く
 今も往生の期も來らんと油斷なく其かまへは候と用
 心に懈怠油斷なく候これを智者と名く豈此世の名利
 に違あらずや

○愚者は香音天上を樂む如く今にも消滅し去るの身
 を知らず命たゆるも此世の名利に迷惑してこれを樂

むこと天上の樂みの如くすとなり

但し此名利とは世間營業上の名利をのみ云ふにあらず佛弟子を装ふもの佛法を賣て名利を貪り佛物を盗むの業未來世に受ること最も重く佛云これを思へば戒を説かざるを得ずと歎慈したまふ經文あるを見るなり

佛の戒律に世間營業の名利は戒めなし唯理不理を教へ正直に營利を得べしと教るなり故に名利を賣るの戒を説かず倫常を以て入るは出るよりも多くせよと得利を教るなり豈戒あらんや世間活業の勤勞はみな名利の爲なり佛は厚く生活業を教るなり勿論々々佛

説なればなり名利は地獄に入ると戒むるは唯佛者道俗が佛法を名とし世人の汗膏より出たる金錢を口舌を以て束縛し取て己の衣食住を虚飾し美食美衣の用に充んとするはみな地獄に入ると戒むること嚴且嚴なり

一人々益なく利なくして物を受くべき理なし此ゆゑに佛者が佛法につけ世間の欲心を以て寄附金等を求るは盜賊推入強盜と同じと云へりこれは佛法を破る魔旬なりと戒むるものなり

一佛說宗師の述るところ若し全くうそならばさもあらばあれ若しほんならば地獄は必定三十二沙門地獄と

は佛の所説なればほんなれば大變々々不便なるは名利佛者なりと云べし未來世のことは我を始め一人も知る者はあらず便りもあらず音信もなし予は佛説を信じて死するなり佛説に解脱すとあれば解脱すと信ずるなり佛説に地獄に入るとあれば地獄に入ると信ずるなり唯佛説のまゝを信ずるものなり佛説のまゝを信ずれば佛の憐むをば我も憐む佛の悲みたまふをば我もかなしむ佛の教のまゝを信ずればなり○爰に記すは佛法を信ずる人の讀むときはますます淨縁深くなるの縁となる佛法を破る名利者の讀むときは瞋恚を起しますく地獄の縁を深く増すことの縁となるなり

◎遠く宿縁を慶ぶ事

大きに所聞を慶喜する事

一經に言く末世の時俗人經を讀て反對す法衰微の徴し此とき男は憍慢心ありて親く信ずる者少く女人の歸信者多くなる此とき女人の長壽するもの多しと男は四十位より白髮を生ずると是は佛説未來記の一つなり

一予は此經を讀むとき思ふに予は日本人なりいかなる佛説を聞くも同佛者に反對を好まず但し外國人雜居後佛法有縁の者ありては無遠慮に反對し佛説を以て佛者とは非制を以て制するの反對をば作すものかと

後往々道俗の中に予に反對し毀譽喋々するとのきこ
 へありさては佛法の日本に渡來爾來千餘年の今日ま
 で俗人の經を讀むと云ふを聞かず若くは日本佛法弘
 通已來俗人の經を讀むは予を始めとするや但したま
 く俗人讀經すと云ふ數百卷に過ぎずと云
 一然らば日本の佛法は今より後ますます衰頽に歸する
 こと全くうたがひなく衰微のしるしには經に照合す
 ればいちじるしく見れたり其目一々擧て云べからず
 今より五十年百年の間には多少そのすがたあらはる
 こと必然なり佛語の虛妄なきは天地の如く日の如
 く明かなり佛者は佛語を是非すべからず惡業報無盡

と云こゝに記すは即佛說なり輕々に評下すべからず
 一此經を讀むも今日まで口外せざりしなり思ふに佛既
 に説たまふ予これを見て私に隱蔽するは亦私なりと
 してこゝに記すものなり
 一經に云世間流者と正理順者と反對すと説れたり佛出
 世在世の古へ既に此二種あり況んや末世をや怪むべ
 きにはあらざるなり
 一中古南都北嶺は世間流者元祖高祖兩聖人は正理順者
 世間流者は名利を主とす故に人を嫉妬怨憎すこれ惡
 業正理順は愛憐悲愍すこれ善業
 一驗密の法は名利を以て破滅す念佛宗は名にあらず利

にあらずと九條殿下の悲懷は古德傳にみねたり正理
 者は悲み述懐をあらはす世間流者は悲歌述懐なし
 一佛の嚴戒は名利を戒むるより嚴なるはあらず但し宿
 業識の發見佛力も化導する能はずと云佛説く信力に
 よて悲心を生ずると
 一萬行諸善を廢し萬行の少善きらひつゝと諸善萬行に
 心をばとゞめずして少善根福徳因縁を以て彼國に生
 るべからず彌陀本願相應の行業にあらざるゆゑにと
 念佛を大善根本願相應の大悲行とし廢立す世間流者
 は雜修名利と相應す正理者は專修念佛々心と相應す
 御流罪の原因三井寺南別所へんよりひそかにしのび

出云々の原因とす

一佛説に云法師にして毀りを被らざるは魔の族なりと
 相承宗師の御遺難亦當然なりとす
 一佛説の正理に少しくよれば少く反對あり多く正理に
 よれば多く反對あり深く正理に依れば深く反對あり
 とす正理に依ること甚しければ反對亦甚しく終に一
 命にかゝることありと説たまふ此時國王宰相信者は
 正理者を保護すべしと説れたり
 一佛の禁戒上根下根各相應あり中古南都北嶺世間人爵
 位階を主とし高位をもてなす名としたりと云々
 一佛法中にて歸信衆生を佛者とし無縁無信衆生を佛法

外とすこれは姑く差別門に依て分別するなり無差別門に依るときは信も不信も一切衆生ことごとく佛法中なり佛法の外に出る一物もあらず萬象は虚空の外に出るものなしと云が如し細目は略す

一公侯伯子男の人爵は治國安民の爲め貴賤の分別獎勵の爲勿論階級すべき必用缺くべからざるものなりこれ即佛法なり

一佛法中大別して世間出世間とす世間も出世間も同く佛法中なりとす差別によて世間と出世間とに分つ各其營ところの行業ありとす同佛法中とす

一出世間中にして亦分て二とす一には世間流者二には

正理順者とす

一切衆生各職業日々これを勤む何の爲ぞやと云はゞ先づ糊口を主とし居食住を専らとす衣食住を全くして同朋國利を旨とする勿論なり

一其衣食住は各及ぶかぎりに力をつくし農工商植産各其營業あり上智は治國に任じ下智は被治國に依る被治者は税納に勤むこれらは申さずとしたこと畧す

一其營業は貧あり富あり富は少なし貧は多し何を貧と云ふ衣食住に乏く美衣美食美宅願ふところに叶はず日々これを勤む中にも農事は寒暑を避けず冬は雪霜

中夏は流汗一日の休業をおしみ一朝の間も勞力を缺

かず唯是衣食住の爲に一生をおはるものなり
 一この貧人の衣食住も心に任せぬ者の財を分ちて糊口
 を凌ぐ南都北嶺は逸居飽食して衣食住は美衣美食美
 宅高樓閣に夏は冷堂に枕し冬は温室に安臥す其財費
 は誰に求るや自身の工商の勞疲より得るにもあらず
 自身の農力より得るにもあらず更に自身の勞力より
 出るにもあらず貧人の汗勞拮据膏汁に出るの財費を
 以てす
 一何にの利益を興へて其報をば得るや知る可らず佛豈
 かくの如きの法を説きたまはんや佛者の装を作して
 佛法を順奉せず衰微破滅は自ら招く自業自得の實自

ら受く憐む可きものならずや
 一佛説て云爾劫中に其實を受く我戒めを説かざるを得
 ずとこれなり
 一これみな宿業の發見するものにして佛力も改めしむ
 う能はずと
 一これに依て觀すれば今我らの此あひがたき法にあひ
 此聞がたき法を聞き此信じがたき信心を得る誠に傷
 嗟すべく深く感歎すべく善導佛十方六道輪廻無際
 感に同ふし遠く宿縁を慶び大きに我ら聞くところを
 慶ぶものなり佛者にして猶聞きがたく況やその他を
 や

◎ 讀經宿縁の事

- 一 恒河沙數の諸佛の下に菩提心をおこす宿因にして經を讀むことをうると云猶經文を寫す能はず一言も語ること能はずとなり
- 一 二恒河沙の人にして讀で寫すことを得るも猶口に言ふこと能はずと
- 一 三恒河沙の人にして讀で寫て口に云ふも深義を語るを得ずと
- 以下八恒河沙まで説玉ふ畧す
- 一 此經文を記すも速く宿縁を慶ぶとの師命をおもひあはせてなり

- 一人のよしあし云ふのがむだぢやと會て記したり實に他のよしあしを云は何んの利益もなきことなればたはごとそらごととも申すことなり
- 一 聖者も他の人のことをば云なり佛にして外道のことを沙汰するが如し
- 但し聖者にして他人のことを沙汰するは慈悲心よりあはれみ又正法を維推せんが爲めなり名利者の人を沙汰するは嫉妬怨憎心に出るなり
- 一 法然佛云おそらくは自由の妄説をなす誑法の罪最も重し國賊にはあらずや親鸞佛云法の魔障佛の怨敵なりと亦本寺本山のいみしき僧と云も法師と云もうき

ことなりと蓮如佛云近頃佛法の次第以ての外相違す
何々此外他の人のことを沙汰し是非すること多く文
中に見ゆたり同く正法の妨げするをおしみあはれみ
不便悲心に出るものとす信力によて悲心を生ずと説
きたまふこれなりとす

一佛の大慈平等の依怙なし然らば佛力の及ぶかぎり
佛は衆生を愍念し玉ふこと平等といへども久遠劫來
佛縁の淺深と開法の多少との差ありて同く人身を同
時に受くゆゑに佛法中の人に差等ありて不同ありと
云佛力も平等ならしむる能はずと云此佛説によれば
人いかに差等あるも人間同士にて彼是沙汰するは眞

にむだごとたはごととの外あらずいかに人間同士にて
是非するも宿業の發見をいかんすべきや佛力猶及ば
すとす況んや人間同士をや

一然ればこゝに記すは眞のむだことなりたはごととなり
予に深くこれをむだごととするなり但本寺本山
のいみじき僧法師と云もみなうきごとなりと云もむ
だごとなり國賊にはあらずやと云もむだごとなり佛
法の次第以ての外相違すと云むだごと也此ゆゑに宗
師は念佛の外はそらごとたはごとなりと自らあらは
すこれなり

一佛は衆生の虚妄に順して虚妄を説く衆生は虚妄を聞

て眞實をうるよとこれなり

一 宗師各々他を沙汰するはむだごととなりたはごととなり
此たはごとむだごとを聞て宗師の自得のあらはれ後
の世の我ら宗師の旨に同心するをうるよとす

一 されば今亦こゝにたはごとをらごとの人の沙汰を記
す後の人このそらごとたはごとを聞て如來の眞實宗
師の正教をうるよとなしと云べからざるものが日々
命あるあいたとし昨日今日とそらごとたはごとを念
佛のかたはらに無利益なる筆の手もかなはぬまゝに
記すこれなりおかしくもあり〇〇もあり
一 何にごととも自業自得に出るものとす信心も亦然り人

いかに我の信心を破らんとするも能はず信心を破る

一 破るものはあらず本山は法主これを滅亡す末寺は末
寺の住僧自らこれを亡す各宿業の致すところとす

一 佛法は佛者これを破る亦維持するも佛者なり破るも
佛者存するも佛者なり佛者道俗人々に破ると守ると

を任ず分拆して何分は守るか何分は破るか一人一身
のうへについて試験して自ら知りうべきなり若破る

分多きは魔族にして未來惡業を受るは佛説の理なり
但し佛説を信ずる者かくも云なり無信者は〇〇〇〇

なり

一 釋迦如來は此世界に在來の法を説くさらにめづらしく巧み出して説くにあらずと説かれたり故に佛説虚妄なきの一つなりとすたとへば山を高しと云き海を深しと云き生を生と云き死を死と説く如し

一 宗師云さらにもづらしき法をもひろめず如來の教法を我も信じ人にもおしふるばかりなりとこれを佛意なりとす

一 予も亦佛説正釋遺訓の文を信じて文のまゝ句のまゝを申すなりさらに一言も加へず減ぜずたとへば正信偈和讃八十通にあると云なき

をなきと云如し經釋に在るとは憚らずこれを云經釋になき言行をばなしと云但し經釋にありと云も宗旨くによて云まじき文あり云べき文あり佛説といへどもその斟酌は佛説にて聞くを以て一宗に於ては一宗師の述るを述べてさらにめづらしき私言を加へず私に減ぜずこれを旨とす
一 佛説に反し一言を申すの罪は六萬劫中地獄の業を作るとの佛説を信ずればなり

◎信心は凡夫同士にて定む

べきものにあらずとの事

一 信心の一點におきては釋迦如來容易に是非の印可し

たまはず行は直に是非を告玉ふなりたましく信心の
ようを自ら述べ白す者あれば云ふ如くならばよめる
べしと告玉に止む

一女子闍法し街上に出て踴躍歡喜す此とき白す彼女
人は決定往生なるやと佛告玉ふ決信のうへに歡喜す
るならば往生すべし若聖解を生ずれば歡喜魔ありて
心腑に入てよるこぶ故に喜ぶまゝに淪墜すると告玉
ふ歡喜は信心にあらずとの證これなりとす

一亦告玉ふ佛者死す遺族は死者往生すと云て申送する
に死者は往生せざるものありと外儀行相を見て信心
の是非を定むべきにあらずとするの證これなりとす

一如是信心の一つにおきては佛印可したまはざるもの
なり

一蓋し信心は無形にして色もなく亦長短方圓の形もな
く目に見えず手これを取るに由なく口いかに述るも
その人の信心は外より定む可きものにあらず無信心
識發動念々自在なりされば信心の一におきては佛も
容易に印可したまはざるの一大事とみねたり

一凡そ目には後世者としられずしてひそかに往生す
る人ありとも申すなり

一古今信心の沙汰し自信を是とし他の信心を非とし或
は爭論するもあり但し自力他力を分ち法義上に於て

論究するは勿論各宗の義あればなり言論上に於て宗義を討論するは勿論なり決定信を取らざるの階梯なればなり所謂念佛往生の旨をしらざらんほどはこれを學ぶべしと云如し所謂この心得にまよへらん人はいかにもく、學問して本願の旨を知る可きなりと云如し是は人々々自信の決定を求むの用意なればなり一人々々自得決心の信心決得におきては佛猶是非の印可を告げ玉はず然るに近頃は容易に他の信心を指して安心違とか信心ちがひとか公然と沙汰する者ありと云此人は釋迦如來の右に出るものなるべし

一古來信心の是非を沙汰せられたるの聞はあれども其

人々何れに今在るや一人も歸り來て告るものもあらず今是非の沙汰する人も亦同く死して何れに往くや知る人もあらず是とするも未來世にて是なるや非とするも非なるや知るに由なし所謂是非しらぬ邪正を分ぬ此身なりとはこれなりと予輩は信んずるなり

一他の信心を沙汰して信心ちがひとか何んとか誹難する者は多くは名利學者多聞者たるものなり或は法義を生活道具にして堂班學級等を拳々服膺し世間人爵を以てなすものなり佛說玉ふ酒一杯の爲めに法文を語ると如是連中に多しとみたり

一或は高坐上にて他の信心の是非を沙汰する者ありと

云此人いかに達學者と云ふとも佛法の式法を知らぬものとする何を以てこれを知るや

一高坐上にて衆中に人の是非を云は佛の禁ずるものなり聽衆に利益なきのみか無利益を與ふればなりとす人の惡を云は勿論人の善をも賞すべからずとは法華經の安樂行品に說玉此外諸經說法の式法あるを知らざる人の不淨說法佛の禁戒をも憚らざるもの多くはものしりがほに申すものなり不便と云可し說法の大切なることをしらぬ名利勝者なるものかな悲愍のいたりと云可し

一佛法中に世間流者と正理順者との二種ありて反對す

と説かれたり前に述ぶが如きの學者を世間流者と名く利養をよるこび法を賣て生活道具にする者なり

一宗師は唱導に趣かずと正教に見たり正理順者はなり此宗師の末流を汲むに宗師に反して唱導に往くをよるこび說法の法式をも心得ず自己學解に任せて法文を説き他の信心を是非するその志しこそあはれむべきものとするべし此人釋迦如來の右に出るものか

一但何れも宿業力の發見とあれば是非するにはあらずたゞあはれに存ずるのみ

一此頃何にか云僧人なりと云大乘非佛説と云ことを云立て聞く人の中にも悶着するものありと告げ來る

ものあり

一予は云御勝手次第なり佛法は虚空の如しと云非佛説と云も佛説と云ふも佛法を滅傷するにもあらず又増

加するにもあらず畢竟して有執戲論と説れたり

一予是らの戲論を聞くの必用あらずいかに大乘非佛説と云も予の信心のさまたげにもあらずさはりにてはあらずたゞあはれむのみ

一佛決心を、しへて云魔は菩薩に化し來云汝の信んずる法は虚偽なり其信心の如く信じたるもの今地獄に入ると大地獄をあらはし中に同心の先だつ人々苦むの相を示してかくの如しと汝早く信心を改めよと云

此時信者少しもあやしまずして云それは同心者の如きも佛語を信んぜざるものなるがゆゑに地獄に入るものなるべしと少しもあやぶむ心なしこれを決心の人と云ふと決心の相を、しへられたり

一僧人にして大乘非佛説を云ふ其僧人は小乗の修行者なるか亦大乘中の法中に生活するものか但し佛法中に生育し佛物を食して生長して今は佛法外に出るものか此三種の外にはあらずとみねたり
一佛法外に出るとせば論外なり若し佛法中に在りとせば霧中に奔走して決定なく自身の進路未だ分明せず自身迷ふものは人をまよはすものとす

一 既に信心決定の人はいかに非佛説と云を聞くと一念の迷心を起さずたゞ未だ信心決定なき人はかゝる霧中の演説にまよひ霧々しくも云ふなり

一 佛法中に在て大乘非佛説を云ものは信心決定なきゆゑとみたり

一 自性の唯心に沈み淨土の眞證を貶す定散の自力に迷ふて金剛の眞心に昏み

◎佛説説聽の一片實試の眞相

一 聽法者十數人遠路より來りて席につき耳をかたむけて聽法の相をいたす此とき説者は佛の教への聽者に對するの辭を以て遠來を慰勞し説者自心中に彼人に

決定心を取ることとを求め願ふ心と起す

一 説者云此方々の中には宿を出るとき今日は彼の人の言を聞て決定の信をとらんと思ひて家を出る方もあるべし又は彼人よりありがたき法を談んずると人の云ふを聞くゆゑに我も一つ聞てみやうと思ふ心にて來る人もあるべし亦は人にさそはれて不計來るもあるべし

一 若さやうの心にて聽くときは終日聞て爰を出て信心はと自らあんずれば少しもかわらず元のとふりなり昨日まで決定せぬ人はやはり同く決定はせぬなり説者は唯一日勞するのみ何の益もなし聽者も何の益も

なく共に一日を費したるまでなり退ておためしなされ但し一々心のもよふは多少あれどもそれく申分けず畧す

一何ゆゑに決定の益をいざるやと云へば佛はこれを説て云法によらずして人に依るがゆゑなりとされば人に依る者に菩提を語るべからず語るも益はなしと説れます佛説のうそなきことは實にしられます

一名利の爲め職分役目とし生活の爲めにする者は信心決定するもせざるもそれはきしおき説きさへすれば勤めはすむ聞きさへすれば名聞はすむ人さへ集ればそれでよしとする人々は世間に多きことなり是らの

人にはそれでよろしいことであるいづれにも云ふもよし聞もよし

世間悪事さへ語り聞く者ありこれに比すればめでたきことなり

一我は名利生活の爲めにもあらず役目職分の勤めにもあらず唯々佛説を信じて共に決定心に住したき念願ばかりなれど人数の多きをよるこばず亦人に依る人方々語ることとはふつくさひなり利益なければなり利益なきのみか我は頭惱症を増すの損ばかりなればなり我の病症は談話と多人の中にまじはるを以て最も害をおぼゆるがゆゑなり

一されば我の談しを聞かんと思ふ心をかへて如來の仰
を聞て決定信をとらんと思ふ心をおこして如來の仰
せのままになりて聽てはどうでありますかさやうの
心を起して聞くなれば佛説を申しましたやう
一未來世のことは目にも見えず一大事と承れば人間同
士の言を聞ては決定信はなかく得たしとは佛説
であります

一其ゆゑは我とお方々と少しも未來世のことにはちが
ひはありませんぬ我の親族六十餘人目の前に死にまし
た其中には親もあり子もあります亦佛法を聞くとあ
りきがぬもあり中によるこびく命おはるも見まし

た其中に一人もどこに居るとのたよりもなし淨土に
往生したと云音信もなし何れにあるやらさらにわか
りませぬ

御方々の内にも我と同様に親戚方も死なれてありま
しやうたより音信はありますまい

一今亦我も其たよりのなき未來世に近々死で往かぬば
ならぬと思へばなかく我にとりては一大事と思ひ
ます然るにたよりのなき未來のことは目にも見えず
音信もなく亦未來世を見て來たと云人をも近ごろは
聞きませぬ又いかに學問しても未來は見にませぬ見
る法はあれども修行せねば見にませぬ其見にせず知ら

れぬは我と方々と少しもちがひなき同士なれば其し
らぬ同士の談を聞て未來世に越く信心を決定しやう
とするはたとへば盲目が盲目に道を問ふと同じこと
なればいかにも私の談を聞ても決定はできませんと佛
の仰せありますそれは我と方々とは同じ知らぬ同士
なればなりそこで知らぬ同士の談しを聞て信心を決
定せんと求むるを人に依ると申します
一今申すことは釋迦如來の仰であります此如來の仰せ
のとふりを信じてされば人間同士のことを聞く心を
やめて今日は如來の仰を聞て信心を決定しやうと云
御相談が調ひたれば我は如來の仰を聞て居るところ

を申しましたよよかるふと思はゞ信じなさいわろかる
ふとおもはゞ捨なさい御面々の御はからひなりと申
すは親鸞佛に習ひました
一我は自身の何れより來て今人身を受て居かそれさへ
知らぬものであります是も佛の教を聞てこそしられ
ますそこで今はたゞ佛説のまゝを信じて一言半
句も一念も私の意をまじへず佛説のまゝを申すだけ
であります若佛説を信すれば若一言でも言て佛説に
相違すれば六萬劫中地獄に入るの業を作ると佛は戒
められます此ことにはわけがあります一言なれども
さまでの重き業となるわけは一々佛説をのぶれば長

くなれば畧します世間には勝手次第に私を申す人々は多ひ者です是は佛説を知らぬか知ても恐れぬか知らぬ人はともかくもあれ知てみれば一言も云はれませぬ

一佛説若しほんならば大變でありましよ名利の爲めに私くし言を述べ其私し言の雜言を聞くは不便のことでありましよ佛説もしうそならば至極都合はよかりましよ我れは一向存じませぬ佛は聞く者同じく兩なびらに墮落すと説かれます釋には師弟ともに地獄におつると申します若し此經釋うそならばよろしひことなれども若しほんならば未來世は大變でありまし

よ
一見へもせぬ未來世のことを佛説なればとて一々信ずるはあまり馬鹿らしいと云人あれども我は見へぬゆへに馬鹿らしいものと我れを信ずるゆへにいよく馬鹿らしくなりて佛語は一句も半言も及ぼとはほんとい信ずるのであります○此ゆへに世間の人々いかに巧みに申すも未來世のことは見ぬ學者達の申しごととなればほんとはおもひませぬ
一釋迦如來の仰せに未來世趣向の信心決定を欲せば自心に佛と信ずる人を師匠とし法を聞くべしされば信心も決定を得ると是は佛説虚妄なき佛説と信じまし

たそれより八家九宗の宗師達の著書を數百卷も點閱
 しました一念も佛と信んずる心おこらず亦諸經をも
 拜讀しました一念も他の如來を信じて未來世を決定
 せんと一念もおこらず亦西方淨土往生を説く經七十
 餘經の多き隨て信心も數々説れてあります何れの經
 説によりて決定せんと思ふ一念もおこらずたゞ善導
 法然親鸞蓮如四如來相承の佛説を信樂して此度の往
 生を期せんとの外一念もあらざるものなり是は何の
 ゆへなるや我々の知らざるものなり
 一釋迦如來は既に此四如來の行蹟ある者を如來と名く
 と説きたまふ我此四師の著書を讀むに自心に如來と

信ず故に如來と信ずる師匠を師とせよとの佛説に順
 じて今は此四師を未來世趣向の師と決定す是に依て
 先づ四師の自督決定の信心を得んと欲して四師各々
 の著書について集め鈔して讀に四師の決信同一にし
 て少しも違なく唯彌陀佛の本願を專修專念す是が相
 承すと決信す是は我の業識所見なり
 一其教示の文語は時機と人機とに對し抑揚あり或は右
 よりし或は左よりすと雖ども一に專修專念是同一な
 り勿論釋迦佛の原則專修專念なればなり專念とは唯
 一念の信心一つなり易は如來願力回向の心と承る
 一さては未來世の師と決定する上は師の云ところ一字

一句も加へず減ぜず師の言のまゝを信ず師の嫌忌するは我も忌む師悲むは我も悲む師慶べば我も慶ぶ師のかしづくは我もかしづく師是非しらぬ邪正もわがぬ身なれば我もわがぬ身なり師愚に還れば我も還る師述懐すれば我も述懐す師歎異鈔すれば我も鈔す師云我はたゞ御名をととなふるばかりなれば我もととなふるばかりなり師云學問を好まんよりは一向念佛して往生をとくべしとあれば我も一向念佛す師云他力眞實をあひせる諸くの正教は本願を信じて念佛を申さば佛になる此外何の學問か往生の要にやあるべきと云へば我も要にやあるべきと云なり源空が所存別

義を存ぜずとあれば我れも此の外別義を存ぜざるなり
 一親鸞に於ては念佛して彌陀にたすけられまひらすべしとよき人の仰を蒙りて信ずる外別の子細なきなりとあれば我もよき人の仰をかふむる外別の子さいなきなり念佛はまことに淨土のたねにやはんべらん亦地獄の業にてやはんべらん總じて以て存知せざるなりとあれば我も亦存知せざるなりたとひ法然聖人にすめされて我念佛を申して地獄におちたりとも後悔すべからずとあれば我も後悔せざるなり乃至其ゆへは何れの行も及びがたき身なればとて地獄は一定

すみかぢかし我も一定すみかぢかし
彌陀の本願まことなれば釋尊の説教虚言なるべから
ず佛説まことなれば善導の御釋虚言したまふべから
ず善導の御釋まことならば法然の仰せそらごとなら
んや法然の仰せまことならば親鸞が申す旨も亦むな
しがるべからず候が愚身の信心に於てはかくの如し
とあれば我の信心も亦かくの如し此うへは念佛をと
りて信じたてまつらんとも亦すてんとも面々の御は
からひなりとあれば我も亦云面々の御はからひなる
べしと亦云く若し惡道へゆかばひとりゆくべからず
師と共にゆくべしとあれば我も亦師とよみにゆくべ

しと云

一師云名利は生死の絆な三途の鐵網にかゝると我も云
三途の鐵網にかゝると師云學問して名利の心るに住
する人は順次の往生いかゞあらんずらんと云文證も
候がかしと我も亦云候ぞかしと師云師弟ともに極樂
には往生せずして地獄におつることうたがひなしと
我も亦云うたがひなしと○以上は佛説のまゝなり
一阿彌陀如來化してこそ本師源空と云々是こそは佛説
に如來と信ずる人を師とせよ決定信をうるとあるを
信順したる現行狀の矩鑑なりかくの如く師を信ずる
ゆへに師とよみにゆくべしとも地獄に落ちたりとも

云々の決定心に住することを示したまへり我れ如是

一師云身は寸断に割れ此宗旨を變ぜずと云我れ亦寸断するも此信を變ぜず

一世界中の大砲を集めて百重千重に圍み討も身は微塵となすも信心を破ることなし況んや世間人語の空聲をや魔は化して佛身をあらはし八大地獄をあらはし同心者の苦相墮獄を示すも決定の信心を破る能はずと云へり況んや世間學者の喋々をや○の如くもあらず

◎信心之事

一經釋の文に順し妄想の分別のたはごとをも離へて眼前見やすく知りやすき世間見聞の實事をならべて信心の妙用をしるして彌陀佛の本願を信樂するの方便となさんとすたとへば相承の教に曲る木を切るときは曲る方にかたむきたをとと云が如し心の向ふところを生じ形を受ると世間眼前の理を述べて念佛を教るの方便とするが如し故に道理文證明かなりと示すが如し佛説に曰く世間の理は未來世の理とは唯一つなりと法華經に説れたり經文は別鈔あれば今畧す爰に記すは唯たはごとの妄想なり此妄想を聞て眞實の信行を得て念佛して往生を期する身とならば有りが

たきことなり讀書は此書を以て方便とし毀置すべからず

一華嚴經に言く信は一切諸法の本なり母なり信と云へば一切の法を攝盡すと故に阿難大士の多聞も女子の一念の信に及ばずと説く此ゆへに相承宗師も同く信を以て究竟とす善導和尚云起しかたくも今信心を興すことを得たりと順て信を以て能入とすと云信心を以て本とせられ候と云又は信心を以て先とせられたりと云猛信決定信深信堅固信此外種々信々と云此ゆへに正も邪も是も非も善も惡も自力も他力も成るも敗るも世間一切天地の間運動有情も無情も集て唯信

一つなり信の裏は疑ひなり生滅成敗唯信疑の二つに攝盡す

一されば是より信の妄想案を述て信の妙用を以て方便となさんかさて妙と云は人心の算用にはづれて知ること能はざる事のあらわれて目に見ることあり目に見ても何のわけありて此ことのあらはれ来るやばかり知られず知られずと雖ども此形此事のあらはれ来るを名けて妙々と云ふなり信心ありて物は其信心のゆへに種々の事あらはれ来るを妙々と云ひならばせり
一古し孝子あり親の木像を作りて禮拜す他の人此木像

と切るに精血を出せり此木像は木なり木より精血の
 出る理あるや知ること能はず妄想すれば是は孝子の
 信心よりあらはれたりとす此木像は我の親なりと信
 じて疑はず木に精血なしと雖ども孝子の一心の信念
 は形なしといへども其信念力は木像の中にとふりて
 精血となりあらはる信心の妙用と云ふべし信心に應
 じて妙用なる精血を出す無形の信心は有形の血を出
 す眼前の事實なり
 一古し一人あり夜中に大石を見て虎出たりと石を虎と
 信じて弓を射るに箭は石を貫き出でたり石に箭の徹
 するの理なし若石を石と信じて射るときは箭の貫ぬ

くはあらず虎と信じたる信念は形はなけれども一心
 の信力は石に入て箭は貫ぬくものなり是は信心に應
 じたる妙用なり
 一世間一切營業上に於て信決すれば其行を營む疑ふ者
 は行せずゆへに猶豫は疑ひより生ず疑は猶豫より生
 ずと申すなり猶豫する者は行せず決信せざるがゆへ
 なり
 一木像より血の出るは誰か其血を造るものありや亦血
 を造るものなきや知るべからず其血を造るものは孝
 子の信心と言はざるべからず其ゆへは無信者いかに
 木像をつくり切斷するも血を出すを見ざればなり

一人いかに石を射るも貫かざれば石を貫くは虎なり
と信ずる信心の力なること
一信心に二種あり一は正二は邪なり正も邪も信ずる信
は一様なり正を信ずるも疑はず邪を信ずるも疑はず
同く信ずるゆへに正を信ずる者は正を行す邪を信す
る者は邪を行す同く信ずるところを行すなり同く
信行するも其應用の果を得ることに於て正を信行す
れば信心の如き果を得るなり邪を信行するは其得る
ところの果來るとき信ずるところと相違の果を得る
なり

◎得果の相違する左の如し

一人は窃盜するとき必ず後其罪の咎れずとの教を信
じて不窃盜を行す信ずる如きの果を得て懲罰の罪料
を受けず是を正を信すれば信ずる如きの果を得ると
云

一人あり其習ふところは窃盜を行するとき種々の術
あり此術を行すれば後更に人の知ることなしとの教
を受て其法を信じて疑はず信ずるゆゑにいかに窃盜
するもあらはれずと信じて窃盜を行して人は知らぬ
くと術を信じたり然るに後發見して懲罰の科を受
く是を邪を信ずるも信は信なれども受るところの果
信ずるところと相違の果を得ると云

人は知らぬと信じたるも終には人に知られて罪料を受る人は知らぬと信ずれども人の知らぬ果來らずして人の知る果を受くゆゑに邪を信ずるの果を得るは信心と相違の果を得ると云

一 信心の妙應たるや木像も血を出だす石も箭を貫く木石も應用をあらはす無情木石猶然り況んや心識有情なるをや

一 法は無量ありとは佛説なりされば正法無量あれば邪法も亦無量あるべしゆゑに佛説に言く我は惡業の果を説かずと

一 信すれば念ずるなり信ずるところの事物を尊敬す物は尊敬するところに集る善人を信すれば信心の妙應して善人の心に入る其信力に應じて善人來り集る惡人を信ずるも亦同じ惡人を信すれば惡人集る有情無情同く信ずるところに集る狐狸を信ずるところに狐狸來り集る魔を信ずる所に魔來り集まる尊敬すればなり

一人を拜めば人も我ををがむ人をにくめば人も亦我をにくむされば人をおがむのが自身をおがむのじや人を惡むのが自身をにくむのじや一生中人をおがまぬ者は人も亦一生中我をおがまぬなり我より人をおが

へば人も亦我をよくおもふなり
 一 衆生佛を憶すとは佛も亦衆生を憶念すとは首楞嚴經
 に説く佛説なり衆生佛を信すれば佛亦衆生を信ず衆
 生佛を拜すれば佛亦衆生を拜す世間出世間の理は一
 なりとは佛説なり
 我は信心を拜むなり大信心は佛性佛性即如來なりと
 信すればなり田舎の無智者といへども其信心は如來
 なりと拜むなり我拜めば亦たますく人來て我の信
 心を拜むものあり我の拜む人は其人も亦我を拜むも
 のあり

◎宿業の事

一 兎毛羊毛の露ほども宿業にあらずと云ことなしと現
 身のなりゆきはことごとく前世の業行の報發見する
 ものと云へり
 一 此義に於て無量に分る其一二を記さん
 一 業報は並び作るに重きに先づ引くと云業前業あり前
 々業あり現在作る業あり何れも重きに先づ報を受く
 善惡同じ
 一 たとへば宿業報にて拾錢を得る宿業の人勤めて十五
 錢を得るの業を今現在に作るときは宿業輕きは姑く
 捨て拾五錢を得る現業の重きに先づ引て拾錢の宿業
 の人にして拾五錢を得るこれは宿業より五錢の多き

を得るこれ現業の重きに引くの例これなり勤めざるべからざるはこれなり

一教へも亦然り宿業悪報を受けて悪を作るとたとへば十斤の重さの宿業悪を持つ人にして教へを受けて二十斤の重さの善業を今現身に作るときは現業の重さに引き宿業十斤の悪はしばらく止て二十斤の善業を得る教への缺くべからざる是なり

一宿業に十斤の善業を持つ人も現業に十五斤の悪業を現身に作るときは宿業の善しばらく発見せずして重き十斤の悪業を重さに引いて発見して現身に受く悪に遠かれ悪友に去れとの教は是なり人は善悪の友によ

るとは是理なり

世間みな然り善としらばますます進むべし悪としらばますます遠るべし古人云悪を去ることは熱沸湯に手を入れて引く如くせよとこれなり

一信力には念力あり念力には精進力ありと信心深ければ念力強く念力つよければ必精進力つよくすゝむと云信力つよければ忍力ますますすゝむと云與韋提等獲し忍と云忍力とはこれなり

一南無阿彌陀佛と云は文字はわづかに六字なれども其功德の廣大なることはさらにそのきはまりなきものと信ずるときは他の善根に心をとゞむべきものよふ

もあらず此功德を信せざるがゆゑに南無阿彌陀佛を
申しても何の不足の心ありてしらぬくせ法門を云ふ
てと申すは他の小善根を加へて佛恩報謝など云て人
をまどはずと申すなり
一念佛の外の外の佛事を何れ何れかも報謝と云ふは念佛を不足
とするがゆゑなり念佛を不足として他の佛事を報謝
と教へられてこれを加へて報謝を勤めんとするにて
おもふほどは行ふこと叶はず終に報謝に不足の心を
生ずるがゆゑに根機相應の本願のとふときも身には
おぼへられずゆゑにひとり居てよるこぶ法なりと聞
てもひとり居てはよるこばれざるものとする也

一そのことばに云信のうへは香花燈明佛檀掃除金錢手
足の苦勞もみな報謝と心ぬうべしと云これは何聖者
の流義なるや善導法然親鸞蓮如四聖相承にはさらさ
らなき名目なり近く證こは正信偈御和讃御文章にな
き名目なり正教は念佛を以て佛恩報謝と定めその餘
はことごとく念佛の助業と名て報謝と名けず居食住
も念佛の助業となるとまで示されたり
一六字の功德を信ぜざる故に他の善根を求むるなり
一經に云此の名號の功德を聞て一念の信心をおこすと
説かれたり
一或云念佛の功德を云へば稱名に力を入れて稱名をた

のむとか云て恐るものありあさましきことなりこの
 言ふひとは多くは西岸に向ふ心もなく名利者の己の
 學問にて分別して未來世に向ふことをはかるふ人と
 なりとみへたり佛語を申し宗師の正教のとふりを申
 してのうへはいかなる思をこすとも佛の御はから
 ひであり凡夫同士の巧者にて信心をとらしめ念佛を
 も申させうるものならば自力になるのならぬのとの
 おしほし候へし

一我はからひにて念佛をも申せ候ばこそ弟子とも申す
 べき彌陀の御もよふしにあつかりて念佛申す人を我
 弟子と申すことは大きな荒涼なり云々とは宗師の

旨なりと予は信ずるなり

一かくも申すは自力になるとか稱名に力を入るとか云
 ふ人は己のはからひにて信心をとらせ念佛をも申
 させ候ふように心のある人にて佛にもまさる人なり
 宗師にも越へたる者とも云はねばならぬ人なるべし
 あなとおそろしくとも申すべき學者なりとも云べき
 かくも云ふ人は多くは名利者の佛法を生活道具に
 して佛の法を賣買する人とみへたり
 一佛云名利心の人の言を聞く人も宜しからず兩なめら
 墮落すとは自活經に説玉ふなり
 一信心のよしあしは釋迦如來もよふいに沙汰し印可せ

ざるなり大切なることしるべし佛にしてかくの如し
 況んや凡夫同士に於てまや
 一佛法を云ふ者はたゞ自信のよることびのあまりを人に
 も申すとありこれは自信信心決定し念佛を申す身と
 なりたるの手つゞきをのへ申すに過ぎずとみへたり
 一又人に對し人の求め聞かんことを欲する人には自心
 の信じたる經釋宗師相承の文語即ち正信偈和讚八十
 通其外の正教其人に相應したる正教のまゝを申し正
 教を讀み候までにて聞く人の信心決定念佛するとせ
 ざるとは久遠劫來如來の御はからひたまふことなれ
 ば凡夫同士のはからひにて念佛をも申させ信心をも

とらせんとおもひはからふことはゆめくあるべき
 ようもあらずと我は信ずるなり
 一我も昔日はさよふのことも存せず法義を人に申
 したることもありしなり追々如來の御もよふし
 つかり宗師の恩教によりて今は前に申すことの聞か
 られたることなり説く人も聞く人も縁あらば佛語宗
 師の遺教の文語にてらしてよきよふに御はからひた
 まふべし
 一人も未來世よりかへりてきて云ふ人もあらずた
 りもなく音づれもなき未來におもむくことの大
 凡夫の我人のはかるふべきにあらざれば申すも
 七十一

經釋抄卷之三

卷之三

か彌勒ぼさつもはゆるふべきにはあらずと示したまふことなりたゞ佛語宗師の御決心に同ふし本願を信じて念佛を申して死ぬるばかりに候は我のことなり他の人には信ずるなりとも信ぜざるなりとも人々各々の御はからひは勿論のこと存じますたゞ一味同縁の後の世の人を待つのみ

南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

◎懺悔之事

一某來て云自身の心中いよく惡しきを覺ひてあさましきに自分ながら驚くことなりこれはいかゞすべ

きやと

一愚老も此ごろいよく自分のあさましきを覺ふることかぎりなし然るに我心のあさましきを思ひうる時はいよく佛恩の深きことを思ひて御念佛を申す時のいたるときと思へば念佛を申さるゝやうなり又あさましきことを思ふときこそよるこび申す時としられますと此も大師に教へられたりと彼人云さればよろこび念佛する時甚だ多くもなりたりと笑ふて去られたり

一つくぐ此よふを自心にあんずるに懺悔文は善導大師の正教中にみへたり是れは大師のたくみ出したる

にはあらず五千佛名經中の懺悔文寫し出したるもの
なればすなはち大師の懺悔は佛説のまゝなるを了す
るなり

一 一身衣服上のよごれたるも夜分は見へざれば知るに
由なし夜明て見れば自心ながらも厭ふほどに見へた
り是は夜明て初てよごれたるにはあらず又夜明て垢
の増したるにもあらず昨夜よりよごれたるも夜分に
で我目に見ることの能はざるなり

一 昔は恥とも知らず懺悔すべきとも知らざりしがいよ
く決定往生の後は一昨日一日我身我心中あさましく
も悪しくも覺ること増すく多きを思ふて懺悔する

もあまりあるほどなりつらく 昔日を思ひ合すれば
此頃あさましきの増したるにはあらず昔日は昨夜分
の如くあさましき心中をも懺悔すべき心もおこらず
いかなることを念ずるも思ふも當然のことに思ひて
却て我らも人なみ以下にはあらずとして人の悪しき
を聞き思ひて我こそ優れりと嬌氣したり
一 昔は獨りを慎むと聞て人の前にて口外に出すことあ
るも人にさそとして咎めざるの事柄なればさうく
心に慙づべきこと、もおぼへざりしなり
一 今や私の心中を打出すも人皆當然のことなりと承知
する如きことをも自心には慙ることあり此ゆへに此

頃は殊の外慚愧すべきことの多きは昔日の比にあらざるを知るなり至く佛智の所致いよく仰がれたりこれは夜明て垢を見るの多きが如し佛智鏡に照らされたるやしられたり

一 魚鳥を屠割し其肉を食ふもさらく慚る心なかりしに今や屠割し食ふときは我身の流轉中を思ひ聖者の精進潔白清淨を思ひ佛道の難きを思へば自身のあさましく思ひて慚愧する心なり昔日は慚じす今日は慚愧すこれ昔日よりも慚愧すべき多きの一也

一 昔は一日三度四度飲食するもさらに慚ることのなかりしも今や一日三度食すれば佛道行者一日一食或は

無食水飲と聞くときは我身の精進力の氣がなくなして飽食美食を好む心のあさましきやと思へば大に慚愧すべきなり昔日に比すればあさましきの多くなるの
一つなり

一 昔は人さへ見ず知らざればさらくに恥る心もなかりしに今や一室の中に獨り在て人の見ぬ知らぬ我心を我として恥ること多しこれ昔日に比すればあさましきの多き一つなり

一 昔日は報恩懈怠するも何とも思はざりしに今やいかにしてかくも懈怠するやと思ふても猶懈怠するあり
大師先哲聖者の後生を一大事とせられたる御遺跡御

遣書を披閱して同く本願一乘の身なるを我ながらに
あさましきを思ふこと昔日に比すれば慚愧の多き一
つなり

一 今や施行の善事なるを知て是を行する能はずこれ全
く子孫の愛河に沈めることにあさましく可厭婆婆を
さほどにも厭はず欣ぶべき彼の國をもさほどにも欣
ばず慚愧するもあまりあるを覺ふ是昔日に比すれば
あさましきの多きの一つなり

一 此外略すかようのことは昔日はさもおもはざる事な
りしむ今やあさましくもおもひ出ること甚多しされ
どもこれ亦たまく思ひ出すによるばかりなりあさ

ましきのいたりなり其ゆへは

一 和尚の文に曰く釋迦諸佛專勸て彌陀を念ぜしむ極樂
を觀想して此一身を盡して安樂國に生るなり行者等
努力く勤めてこれを行せよ常に慚愧を懷て仰で佛
恩を謝せよとは般舟讚の結文なり

一 されば昔日恥なきは昨夜の夜分なるが如し今日たま
くも昔日に比すればあさましきの多く見へたる夜
明て垢を知るが如く大悲に値遇し照されてかくもあ
らん然れば今後はいよくあさましきを見るの多き
にいたるべし慚愧の多きは佛恩報謝の時節よと仰ぎ
申したりこそおもはるればわろからんにつけて

いよいよ願力を仰ぐべしとあればいよいよ仰ぎ佛
恩報謝の多くもある也

一 以上は外賢きを申すことなり常懷云々愚輩はたまた
まなりいかゞ名づくべきや自ら知らず穴賢々々た
念佛申すばかりなり或は自心不相應なるめでたき心
のおこる時もあり愈々佛恩のふかきを仰ぐ也

◎又々たはごとのくりことを申す也

一 南無阿彌陀佛と申して何の不足ありてかくせ法門を
云て人をもまどはす云々仰せありき
一 たとへばこゝに生ながらの盲目の兒あり平生人々の
言を聞くに灯燈蠟燭油火を照して見るくくと云ふを

聞きなれて物を見るとさへ云へば彼兒は灯ちん蠟燭
をとれせくと云ふ或日兒云灯燈をとれすべしと
と求む父母教へて云今は日出でたり日中なり灯燈を
燈すも詮なしと教ゆれども兒は夜も晝も分たざれば
猶求めてやまず父母教へて云汝は盲目なり汝見すと
いへども此日中日出たれば此大千世界にある灯燈ヲ
ソフを悉く集めて燈すと一日の光に及ばざること
不可思議なり千年萬年一切十劫萬劫中燈すと此日
中の一日の光りに及ばず目ある人の此言を聞く誰か
疑を入るべきや實に然り萬劫中一切世界の蠟燭油山
林家屋を一時に焼て照すも一日の日光には及ばざら

こと言ふべからずこれは小兒も知るべきこと也
 一南無阿彌陀佛と申すは日光の照すが如く自餘の業行
 供養功德は燭火油火山林家屋を焼て照すが如し此ゆ
 へに經に言く一切世界の珍寶を集めて一切中十方諸
 佛に供養する功德は一聲の念佛に比すれば百分一千
 萬分の一から分の一にも及ばずと説れたり
 いかなる火の光の照すも日の光りの一日の光に及ぶ
 こと能はざるが如くいかなる供養を致すも一聲の念
 佛に及ばざるは不可思議となりかゝる無上寶珠の名
 號をとへて此上に何の不足あるべきやされば南無
 阿彌陀佛となふれば十方諸佛菩薩も諸天神も魔王

も悉く圍繞して守りたまふとは利益和讃にてしるこ
 ころ也いかなる供養いかなる佛事を勤行すればとて
 諸佛の守りたまふと云和讃はなきなり唯信心と念佛
 と二を以て守ると示したまふは佛説なりされども我
 れ生盲にしてさほどまで萬圓全備ともしらずして念
 佛を申しながらも不足の思ひを致すは彼小兒の灯燈
 を日中に求むるの比なるべし
 一流弊とは申しながらたま〜蠟燭の大きく或は赤黄
 の色をつけたるをもし花瓶は眞鍮よりはせんとく
 か何とを求め佛檀の金箔塗り百圓も千圓も代價を
 出し或は此外一切の佛檀具を求め又は朝夕の勤行す

れば餘ほと報恩の行を勤めたりとし又は寺參詣も繁
くすれば信深者の如く我も人も思ひ定めて云ふ念佛
ばかりをととなへたらば往生するやうに思へりこれは
大きにおぼつかなしと聞て他の佛事を餘ほと報謝と
心得て念佛申すものをと却て下見て揚々として諸事
を勤むるは殊勝に見へたり見聞する人々もさうと思
ひて念佛すなほち南無阿彌陀佛を申してばかりにて
は心に不足と思ひて何か物たらずさびしくも思ひて
種々の佛事をも語り合せて信心も決定の思ひに住せ
ず念佛のみにては不足と思ひ其餘の行業を足息せん
とすれば日用生路につけて勤むること叫はず只心く

るしく思ふばかりなりたとひ一生中頭焰を拂ふ如く
勤行するも一切万劫中勤行するも一聲南無阿彌陀佛
と申す片端にも及ばざること知らず此ゆへに何の
不足ありてかと教へたもうところなるべし南無阿彌
陀佛と申すは本願の名號なれど報謝の不行とこそは
教へたまへりされば南無阿彌陀佛と申すは日中日光
の如く餘の報謝の行は行燈の如しさればいかなる佛
事を行するも諸天神諸佛圍繞し守ると云教へはきよ
まひらせざるところなりされば圓融の嘉號は惡を轉
じて徳となすの證智なりと贊歎したまふ也寺參詣は
大行とも又は佛檀を求るは大行とも佛具を求るは大

行とも申すことばなきなり本願の行にあらざれば也
金錢を多く出すは
大行とも又寺堂建立するを大行とも五日七日の法會を設るを大行とも申すことばきはきはへらぬことなり

一五念の行あるは誰もきくところなり勤むべきは勿論なりさりとして本願にのぞむれば誓願の文中に念佛の一行の外明文なし此ゆへに一心一行と教へたまふは經文のこゝろなることしられたりさればとて念佛の外元より報謝の志しより出るを捨つべきにあらざるは入出五門五念門の行を示したまう諸大師の懇篤知るべきなり

一こゝにたはごとを申すは我昔日今の世間に云ふ如きを聞て決定の思ひに住せざることありしが其後經釋の御教誨大師の華文懇篤なる教誨によりて昔日の非を思ひ若亦後の日我の如く世間流者の言に依止して決定の思ひに住しかたき心くるしくもおもひわつるふ人もやあらんと同行同見の良朋もあらば所縁ともなりなんとくりことのためごとを申すのみをかしく穴賢々々

一我昔日は何ゆへに決定の思ひに住せざると云は第一には自心のよしあしを信心に足し又は諸供養を信心に足しよろこびを信心に足したるのゆへとみへ

たり又信心を先きんずるとのことをしらざりしなり
信心決定をば後にして心のよるこび又は心のよしあ
しを見又諸供養を先きにするがゆへなり教へと相違
するがゆへなり教は信心決定を先きせよとあるに我
は信心を後にす心のよしあしよるこび心及び諸供養
は信心決定の後とあるを我は先きに求めたるがゆへ
なり

南無阿彌陀佛 願共諸衆生往生安樂國

明治三十年五月

小川獨笑

經釋拔萃法語集 卷之三終

明治卅五年五月廿七日印刷
同年五月廿五日發行

兵庫縣下武庫郡西宮町濱東三丁目
百九十三番屋敷

編輯兼 發行者 勝部重左衛門

京都市下京區室町通魚棚上ル堺町

印刷者 松崎辰三郎

京都市下京區油小路松原上ル麓町

印刷所 圖書出版株式會社

非賣品
不許翻
刻轉載

220
2
11

